ドラゴンファミリー

暗黒女帝・猫又垂氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンファミリー

【Ｎコード】
Ｎ３４９０Ｉ

【作者名】
暗黒女帝・猫又垂氷

【あらすじ】
戦国伊達家（藩主：輝宗～政宗にかけて）を舞台としたパラレル時代小説（衆道系）のシリーズモノ。サブタイトルごとに主人公・カップリング変更あり。史実・事件などは全く無視のフィクション小説です。

影竜　1（前書き）

＜パラレル歴史的衆道系時代小説＞のシリーズです。
第一弾「影竜」は　片倉小十郎景綱が主人公。お相手は、藩主輝宗。
他にも伊達家臣団が登場致します。
実際の登用年代とは、かなりの食い違いが存在します。歴史的背景は参考にはしてありますが、史実とは全く違う設定背景になっています事を、ご了承ください。
あくまでも、フィクションモノです。
実際の史実・事件・人物・団体とは無関係です。

影竜　1

何が何だか分からないまま、この御館に連れて来られて半月。
次男の気軽さから、何も生家の事など考えてもいなかった矢先のこと。改めて、『武家』と、『生家』の仕来りの違いに戸惑う毎日。
そう、景綱（かげつな）の生家は神社であった。神仏に囲まれた生活から一転し、屈強な男どもに囲まれた生活に無理やり転身させられたのだ。
仕方のない事だとも思う。自分の今後を考えてくれた両親の処置だと、自分に言い聞かせた。
――体裁の良い口減らし。
現実の事だから、仕方も無し。
戦乱の世の中では、自身の力量だけでは生き抜いてはいけない。
――そう、考えた彼の両親が見つけて来た奉公先であった。
とは言っても、今までとは勝手の違う世界。齢八つに満たない状況では今だ母恋しさが募る。
慣れない小姓勤めに辟易しながらも、今日も無事に自分の与えられた小部屋に戻る事が出来た。
何が辛いと言って…
勝手が分からないままに、気を使う事の苦労。風習も、仕来りも全てこれから覚えていかなければならないと思うと…
決して物覚えが悪いわけではない。周りも、色々と親切に教えてくれる。
ただ、ただ不安なだけなのだ。本当に、自分がこの世界で生き抜いていけるのかどうかが…
明日の勤めの手順を思い起こしながら、布団に身を横たえた。
いつもの事ながら、睡魔はやってこない。何度も、何度も寝返りを繰り返して、余計に覚醒していく。
（いくらなんでも、そろそろ寝ないと、明日の勤めに差し障る…）
そんな事を考えれば、尚の事眠れなくなると言うのに…

部屋の外から聞こえる足音。不寝番の見回りの刻限になってしまった。焦れば、焦る程深みにはまっていくのに、中々抜け出せない。
そんな中、誰かの足音が部屋の前で止まった。
そっと、戸の開いていく音。誰かの忍び足の気配。
その音を聞きながら、景綱はギュッと蒲団の端を握り締めた。目も開けられず、小刻みに体が震え出す。誰とも知れない侵入者に向き合う事など出来ないままに震え続けた。
「眠れぬか、景綱」
ふと、掛けられた声。
その主の存在に驚き、景綱はガバリとその身を起こした。
「…御館様、…なぜこのような所に」
問う声が震える。
寝間着姿の輝宗（てるむね）が、寝具の上にどっかりと腰をおろした。
「寝れぬのか、景綱」
返答に困った景綱は、ただ俯きながら、小さく頷いた。
「無理もない、か。…母親恋しい年頃だからな」
輝宗（てるむね）は、優しく景綱の頭を撫でた。
抱き締めるように寝具の上に横たえられる景綱。
主君の思惑が分からないまま、緊張に体が強張っていった。
まるで、添い寝の体制。輝宗の胸の中に収められるように、景綱の体があった。
「…景綱は、温かいな」
輝宗の手が、景綱の体中を優しく撫で続ける。
「…あの、御館様」
「良いから、黙っていろ」
言葉を禁じられた景綱は、為すがままに抱き締められ続けた。
体を動かす事も出来ず、ただ輝宗の胸元に頭を預けた。
伝わって来る相手の体温。聞こえて来る規則的な鼓動。そして、優しく撫で続けられる体。
なんともいえないその刺激に、いつしかウトウトとしたまどろみ

の中に誘われていった。
（…まずい、眠ってしまう…）
そう思っても、睡魔は断ち切れなかった。
必死に覚醒しようとする景綱を感じてか、
「良い、そのまま…」
耳元で、輝宗が囁いた。
輝宗の息遣いを感じながらも、なぜか徐々に力が抜けていった。
（…本当に良いのだろうか）
幼い景綱は、強過ぎる睡魔の誘惑に勝つことはできなかった。

すっきりした目覚め。
反面、景綱は青くなった。
寝過ごした――――。そう理解出来たのは、差し込む日差しの高さゆえ。
慌てて身支度を整えてはみたものの、これからどう対処しようかが浮かんでこなかった。
輝宗が、「寝かせて置け」と、他の小姓衆に命じた事など少しも知らぬ景綱である。
どうしたものかと、考えあぐねている所に、小姓頭が握り飯片手に部屋を訪れた。
「申し訳ありませぬ。」
ただ、ただ平伏するしか思いつかなかった。
「何の事だ」
と、切り返す小姓頭。
慌てて、面を上げると、笑いを堪えた表情であった。
「殿からの下知よ。…今日は休め、とな」
伝える声が心なしか震えている。
「殿の示唆なければ、とっくに叩き起こしている。慣れぬ武家作法のなか、お前は良くやっているよ」
握り飯を突き出しながら、景綱に向かい合うように小姓頭は座り

込んだ。
「武家の出の奴でも、逃げ出す者だっているのにな」
お前って可愛いな――、言いながら、小姓頭は食えと握り飯を突き出す。
差し出された、飯を前に、初めて空腹感を覚えた。

何もすることなく過ごした日中。その為なのか、それとも、寝過ごした付けなのか…。その日も、一向に睡魔は訪れなかった。
ただ、前日までの不安は無かった。
ゆったりと、天井を見つめながら、体を寝具の上に横たえていた。
昼間の小姓頭との会話が思い出された。
武家作法の数々。小姓としての仕事の話。そして、他の家臣たちの事…。雑談を交えてのちょっとした情報公開。
（少しずつ覚えていくしかないか――。）
ちょっとだけ深い溜息をついた。
「なんだ、今日も眠れぬのか」
ふいに視界を遮ったその顔に、思わず飛び起きそうになったのを、声の主がそれを禁じた。
「…殿、何でこのような場所に」
思わず小声で問いかけた景綱。
「何時もの様には、呼んでくれぬのか。…御館様、と」
見降ろさせる視線に戸惑う。
「…御館様、何故このような場所に…」
景綱の問いに答える気もないのか、輝宗は粗末な寝具の中に身を入れて来た。
「まあ、気にするな。…それにしても、景綱は温かいなあ」
呑気な物言いに唖然とする景綱をよそに、輝宗はその体を抱き込んで来た。
「早く、寝ろ。…お前の寝顔が見たい」
そんな事を言われても、中々眠れる訳ではない。

身動ぎしようとすると、昨夜と同じ体制に抱き込まれた。繰り返される体中の刺激と、聞こえる相手の鼓動。時々頬をかすめる様な輝宗の吐息。相手の体温を感じる安堵感に、いつの間にか、景綱は深い眠りに誘われていった。

夜が明ける前には、既に輝宗の姿はなかった。

何日かに一度の割合で、深夜に輝宗は景綱の部屋を訪れた。それも、計ったかのように景綱が眠れぬ夜を過ごしている時に――。

景綱にとっても、その事が当たり前のように思えて来るほどの間隔。不思議と、輝宗に抱き締められると、穏やかな眠りにつく事が出来たのだった。

二人きりの時に限っては、景綱は輝宗を『御館様』と呼ぶようになっていた。他の小姓衆が同席の時は、皆と同じように『殿』と呼ぶ。が、ある時、その事を指摘された。しかも、輝宗自身からである。

「何故、何時もの様に呼ばぬ、景綱。…皆のいる前では呼べぬのか」

小姓衆の同席している最中での出来事。末席の景綱に向って、輝宗は声高に、まるで叱責するかのように。

「そう言う訳ではございません…。が、慣れない武家作法の事、皆さまと同じ様にお呼びするのが宜しいのかと…」

恐縮しきった景綱の声は、徐々に小さくなっていった。

「気に入らぬ。何時もの様に呼べ、景綱。」

「はい、…御館様」

「そうだ。他の者も、これからはそう呼ぶが良い。『殿』など、他人行儀で好かん」

それきり、輝宗の前では『御館様』と言う事を義務付けられた。

影竜　2

「景綱、殿が呼んでおられたぞ」
もうすでに、顔見知りになった家臣の一人から、すれ違い様に声を掛けられた。
輝宗に仕えるようになって数か月。いまだ、勝手が掴めずに戸惑う事はあっても、徒小姓としての務めを必死に果たそうとしている景綱であった。
いつも通りの務めを終え、つい先程「下がっておれ」と言われたばかり。特に、夕刻迫るこの時間帯には、殆ど景綱に用向きが言い渡される事などないのである。
年長の小姓衆には、不寝番などの用向きもあるのだが、いまだその順番は景綱には回って来てはいない。
（私は、何かの不手際でも起こしてしまったんだろうか…）
不安を抱えながらも、輝宗のいる奥座敷の方へと急いだ。
「景綱、ただ今参りました」
奥座敷前の扉に向かって声をかけた。
じっと、中から声がかかるのを待つ。大した時間ではない筈なのに、景綱には無限の長さに感じられた。
開けられる、戸の音にも気がつかないまま、じっと頭を擦りつけるような姿勢で待機する。
「畏まってないで、中に入れ」
輝宗の声掛けに、影綱はゆっくりとした動作で、奥座敷に体を進み入れた。
何事で呼ばれたのか未だ理解できない景綱はただ平伏するばかり。
「景綱、こちらに…」
酒の相手を務めていた小姓頭が、席を譲って来た。勧められるままに、彼の居た席に座ると、今度は小姓頭から酒器を預けられた。
「殿の所望である。粗相無きよう努めよ」

小姓頭の耳打ちに、小首を傾げる影綱。
分からぬというような表情で、酒器を受け取ったのを確認すると、
「御館様、私はこれで…」
と、さっさと退室してしまった。
呆然とする景綱。二人きり取り残された空間に何とも言えない雰囲気が漂う。
「注げ」
空になった杯を差し出した輝宗。
手も震える中、そっと酒を注ぐ景綱。
じっと見据えられる視線を感じながらも、景綱はその方を向けないでいた。
「何か言いたそうな顔だな、景綱。」
酒香を纏わせた輝宗が覗きこんで来た。
「未だ御用向きを伺っておりませんが…。」
御館様と、続けるつもりが出来なかった。
輝宗に抱き込まれるような体制で差し出される杯。
「わからぬか…。まあ…、飲め」
先程まで、輝宗が口をつけていた物をそのまま差し出されたのだ。
抱えていた酒器を床に置き、震える手でそれを受け取る。並々と注がれる酒を見つめていると、再び輝宗から「飲め」と言われる。
仕方なく、それを口元に運ぶ景綱。
鼻を掠める酒香にくらくらしながらも、喉に流し込む。突然襲い来る灼熱の感覚に、景綱は半分以上も残しながら咽込んだ。
その様を、いかにも楽しげな輝宗の笑い声が包む。苦しそうに咳き込む景綱の手から杯を取り上げる。
「酒すら、まだ嗜んだ事がなかったか…」
景綱の残した酒を飲み干しながら、咳き込むその背中を優しく摩る。
「…御館様」
涙目になりながらも、言葉を探すように視線が彷徨う景綱。

その様子に、上機嫌の輝宗が用向きを伝えた。
「今宵、付き合え」
意味も分からぬままに、キョトンとした表情を主君に向ける景綱。
手酌で注いだ酒を、口移しで景綱に与える輝宗。
その行動の意味など考える間も無いほどに、景綱の思考は酒精に犯されていった。
朦朧としてくる意識の中で、景綱は抱きあげられるような感覚に襲われた。どこかに移動されるような感覚にもかかわらず、徐々に意識は濁っていった。

のどの渇きを感じて、景綱は眼を覚ました。飛びこんで来るのは、見覚えのない部屋の様子。ゆっくりと、体を起こせば、見事な寝具の上に横たえられていた事に気がつく。しかも、いつの間にか、自身は内着の姿。
「のどは乾かんか」
声の方にむけば、輝宗がその身を横たえていた。
今だ酒精の抜けきっていない状態では、その状況を認識するのがやっとの景綱。
「この意味すら、わからんのだろうな…」
その、問いかけにすら満足に返答できないでいる景綱を、大きな輝宗の体が抱き崩していく。
「それも、一興」
と、呟くように、輝宗の体が景綱の上に覆いかぶさっていく。
口合わせの合間から流し込まれる潤いを、景綱は静かに目を閉じ飲み下した。強いのどの渇きを、流し込まれる潤いが満たしていく。繰り返し続けられるその行為の意味を未だ知らぬままに。
ゆっくりと目を開ければ、まともに輝宗の視線とぶつかった。
「御館様…」
「良い、そのまま…。体の力を抜いておれ」

理解できぬまま、輝宗の言いなりになるしかない影綱。
撫でられるような手の動きに、むず痒さを感じながらも、ゆっくりとした呼吸で体の緊張を解こうとした。近づく輝宗の息遣い。目を閉じ、緊張に震える景綱。
啄むような口合わせの後で、激しく貪られ、呼吸が乱れていく。撫で摩る、輝宗の手が下肢に及んだ時には流石の景綱も、目を見開いた。
揺する様に刺激される事で湧き上がって来る初めての感覚に景綱は戸惑いを隠せないでいた。
「…御許しを、御館様。…お願いでございまする」
微かな声音での懇願に、輝宗は応じる様子はない。
ますます煽りたてられる感覚に、ついに景綱は涙をこぼした。熱く滾りあがる感覚。それが、快感であることすら未だ影綱は知らない。
「埒(らち)を開けて良いぞ、景綱。…今宵、我が手で男にしてやろうから…」
その意味すら理解できず、ただ、その刺激から逃れようと体を捩る。逆にその行動が、輝宗を煽りたてる事になるとは、景綱自身気付いていない。
強まる刺激に、景綱の腰も揺れ出す。
「どうか…、どうか…、お許しを…」
「許さぬ、景綱。…このまま」
その言葉と一緒に、輝宗の手が薄皮を押し下げた。
「ひいいっ……、いっ…たいぃ…」
幼きまま泣きじゃくる影綱を組み敷いたまま、輝宗の愛撫は続く。必死に腕を張り、その痛みから逃れようとする影綱を宥めるかの様な優しい愛撫。
「痛い…、そこ…、痛いの…、もう…」
「これ、そんなに暴れるな影綱」
形を変えたばかりの影綱のものを、ゆっくりといたわる様にさす

りあげる大人の手。
　すべてが初めての感覚の影綱にとっては、ただ、ただ恐怖しか感じない。縋りつくような気持ちで輝宗に視線を向ければ、口内をいたぶられる。体の変化に気持ちがついていけずに、ただ寝具を握りしめながら涙をこぼした。次第に強まる、切羽詰まった感覚。全身の血が滾る感覚。
「お許しを…、もう…これ以上は…」
「…かまわん、出して見せよ。」
「ダメ…、あ…、……んんん」
　先端を強く刺激され、影綱は全身を朱に染めながら大きな手の中に全てを吐き出した。吐精後の虚脱感に包まれながら、乱れる息の苦しさに喘ぐ。
　上機嫌の輝宗は、いまだ息も整わぬ景綱を抱きとめながら、耳元で囁く。
「んん、嫌だったのか。我が手で男になるは…」
　答えも返せたもんではない。影綱は、ただ輝宗に視線を走らせるだけだった。
「今しばし、耐えてみせよ。…景綱」
　主の意向に逆らえる筈もなく、怯えながらも景綱は小さく頷いた。

「少しばかり、無理をさせたか…」
　何度目かの吐精の後、深い眠りの中に落ち込んでしまった影綱。腕の中の幼き裸体を愛おしげに抱き寄せる輝宗だった。
　輝宗は、意識の無い景綱をそっと抱きあげると、部屋の外に向かって声をかけた。不寝番の小姓頭が傍による。
「…暫く、休ませよ」
　その言葉を合図に、小姓頭は景綱の部屋へと先導する。小姓頭の敷いた寝具の上に、幼い体を横たえると、輝宗は小さな溜息を洩らした。

血の滲んだ唇の上を、そっと輝宗の指先がなぞる。声を押し殺そうと、噛んだ痕だった。
「二三日は休みを与えてやれ」
「御意。」
そのまま、輝宗は「景綱を頼む」と言葉を残し、部屋を出て行った。
「相変わらず、殿はお優しい…」
背後を見送りながら、小姓頭はそう呟いた。

影竜　3

景綱の休暇明けに、小姓頭は元服し、名を宗実（むねざね）と改めた。家臣の一人として名を連ねる事を許されたのだ。小姓衆の羨望を集めながらも、彼らの衆目の中でその元服の義は行われたのであった。
いつか自分も…、そう思いながら彼らはその姿を見つめ続けた。ただ一人、浮かぬ表情の景綱を除いては…。

元服の義の前夜、小姓頭は景綱の部屋を訪れた。
景綱が、そろそろ寝ようかと思っていた矢先のことであった。差し入れを片手にどっかりと景綱の傍に腰をおろした小姓頭。
「この度は、元服の義…、真に」
祝儀の言葉を述べようとした景綱を、小姓頭は制した。
「堅苦しい挨拶は抜きだ、景綱」
酒が弱いそうだな…、と小姓頭は先日の件をほのめかした。
思いもかけない物言いに、景綱の顔は朱に染まった。
そんな様子に構うことなく、
「今度の小姓頭に、お前を推挙するつもりだ…」
と、影綱に向かって杯を差し出してきた。
受け取りながら、景綱は「何の御冗談を…」と、苦笑いを浮かべた。
「殿も、その気らしい…」
その言葉に、景綱の手中の杯に波紋が広がった。
「他にもいらっしゃいますでしょうに…、何の酔狂か」
心なしか、景綱の声が震えた。
「酔狂で男子が抱けようか。…そう言う事だ、景綱」
側衆としての務めぞ…、と続けられる言葉。
「その身に情けを受けても、殿が盾になる事を嫌だと申すか…。景綱よ」

手の中の物を一気に煽りながら、景綱は言葉を探した。
「それと、これとは話が違いましょう。…側衆なれば、何事にも秀でた者と貴方様は、教えて下すった。…なれば、…他に適役がおりましょうに」
なればこその推挙よ…、と小姓頭は続けた。
「当面は、俺には役職はつかない。暫くの間は、今の責務を続ける事になるだろう。だからこそさ…。俺が、直々に教え込んでやるよ。…殿からも、そう言われているばかりではないからな。まあ、とりあえずは酒に呑まれん様にせんとな」
満面の笑みを浮かべながら、俺もお前が気に入っているのさ――、と続けてきた。
持ち込みの酒の大半を開けながら、小姓頭は景綱に向かう。
聞かされた事の重大さに、景綱はただ困惑するのみであった。小姓頭の去った後も、景綱は溜息を零すのみ。こうして、夜は更けていったのであった。

宗実の元服後も、小姓衆の体制にさほどの変化も見えなかった。宗実には当面の間、当主輝宗の側衆としての勤めがあったからである。どの道、戦となれば年若い小姓衆の参戦はあり得ない。有事に際しては、元服後の小姓が当主の盾としてその任に当たる。そう言った経緯を経て、徐々に城内の役職へと振り分けられて行くのである。
当面、目立った小競り合いの機会すらない今は、通常の側小姓としての仕事のみ。それすら、他の若衆が殆どを行ってしまう為、事実上宗実には「不寝番」以外定まった仕事はなかったのであった。
その為なのか、或いは輝宗の指図なのか…。
事ある毎に宗実は景綱を鍛錬場へと呼び出す。景綱自身も、目上の者からの呼び出しとあっては断る事も出来ず、自分の担当分の仕事を早めに終了させその時間を捻出するようになった。そうして、いつの間にか「午後の恒例行事」として、小姓衆の中に認識される

ようになっていった。
城上がりの前から、武道に通じていた宗実とは違い、景綱の方は殆ど素人に近い状態である。宗実は、刀の持ち方から組み手の型に至るまで、手取り足取り教え込んでいった。
当然組み手となれば、一方的に景綱が叩きのめされていく。体からはいつも蒼痣が絶えない。木刀とはいえ、打ち込まれればそれなりに痛みを伴う。当たり所が悪ければ、当然息も出来ぬほどの激痛が走る。あまりの姿に、さすがの宗実も防具の着用を勧めてきた。しかし、それすら影綱は断った。
「当りで痛むのは、己の未熟さゆえ…。それに、このままでは戦場で命を落とすことになりましょう。…己への戒めの為、そのような物は不要でございます。」
痛む涙を堪えながらも、影綱は宗実に向かった。
「手加減も、無用でございます」
「よく言った、影綱。」
宗実も、その相手の気持ちを汲んでか、打ち込みに容赦ない。
気持ちはあっても、所詮は素人。影綱は容赦なく叩きのめされる。その激痛に意識を飛ばしてしまう事もあったほどだ。
気がつけば、いつもの自室の天井が見える。痛みよりも、相手に掠りもしない、己の未熟さに悔し涙が零れた。相手の…、宗実の目が、未だ本気を出していない事を告げていた。いつもの、やさしい表情のままで、これ程に打ち込まれ、叩きのめされる。
（俺は…、この程度なのか…）
考えるほどに、涙は止まらなくなっていった。
「気ぃ付いたか、影綱…」
うつろな表情のまま、天井を見つめている影綱。
床のそばに腰をおろした宗実が、そっと流れる涙を指先ですくう。
「悪いな、影綱。体…、拭くから」
声をかけながら、宗実は布団をはいでいった。手桶の湯で湿らせた手拭いで、露わになった部分から拭き清めていく。

「どこか…、体の調子でも悪かったのか」
「…なぜ、です。…別に、いつもと変わりませんが…」
微かな影綱の声の震えを、宗実は聞き逃さなかった。
「いつもと…、変わらん…ねえ…」
言うが早いか、宗実は影綱の単衣を勢いよく肌蹴た。
打たれた傷の痛みに影綱の顔が歪む。
うっすらと血の滲む胸元を、宗実の指先が走る。
「手合いで出来た痣…、だけじゃないよな。…これは」
何を、示唆されたのか理解したとたん、影綱の顔が朱に染まった。
「昨夜は、お前の当番じゃなかったはずだが…」
見間違う事も出来ないような、鮮やかな吸い痕の点在する体。しげしげと眺められる事の恥ずかしさに、影綱は身を捩った。
「不寝番の最中に、どこの誰と乳繰り合ったんだ？…ん、影綱」
胸元の突起を強く握りこまれ、影綱の口からは短い声が漏れた。
「お前、仕事中に…、他の男咥え込んだってのか」
耳元でどすの効いた声で詰め寄る宗実。
「ちが…、…そのような事。ひいいっ…」
言い訳すら許さぬ勢いで、強く捻りあげられた。
体ごと抑え込まれては抵抗の手段すらあったものではない。
宗実は再び問い詰める。
「じゃあ、この痕はなんなんだ？…あん時の吸い痕なら、とっくに薄れてんだろうが」
優しさの欠片も見せないその表情に、影綱は怯えきっていた。悔し涙とは違う涙があふれてきた。
「いったい、誰に、…させたんだよ、…これは」
鬼神の様なその表情に、影綱は震える声で伝えた。
「…それは、…御館様が、ひいっ…んんん…」
「はあああ？…っていうか、おめェ…、なんで…」
困惑げに眉根を寄せる宗実。思わず、摘む指に力がこもってしまったらしく、三度影綱は悲鳴をあげた。

わりい…、と言いながら放たれた部分が、ずきずきと痛む。
三度目の問いかけに、渋々影綱は事の次第を語った。
当直番が、寝落ちたのを良い事に、次の間で待機していた不寝番の影綱の元に輝宗がやってきたという話であった。
「それで、お前…。っていっても、断りきれるもんじゃないもんな。…それにしたって、そういう時は…。って言えねえか。…お前の性分じゃな」
そう云いながらも、未だ宗実は影綱を組み敷いたまま。怯えに歪んだ影綱の目元をペロッと舌先で舐めてきた。
驚きに目を見開いた影綱。
「…なっ」
次の瞬間には、宗実の顔が覆いかぶさってきた。
「…もう、痛え事なんかしねえから。…悪かった」
重ねられた唇の隙間をぬうように、相手のモノが差し込まれる。滑ったその感触は口腔内を蹂躙する。宗実の顔が離れても、影綱の呼吸はみだれたまま。擦れる胸元からは、淫靡な感覚が湧き出してくる。
先ほどとは異なった感覚に潤みだした影綱の瞳を覗き込む宗実。無意識下の媚態が目の前にあった。
「…殿の気持ち、わからんでもないか…、なあ…」
抱き込まれた影綱が、宗実の手管に啼かされるまで、大した時間はかからなかった。宗実の指先が肌の上を滑るだけでも、影綱はびくりと震える。元々敏感なのか、ただ単に経験不足なのか…。手慰み程度の刺激にでさえ、影綱は反応し、快楽の証を相手の手の中に放った。
「…おめェ、夜番明けはちゃんと休め。…怪我させちまったら、元も子もねえしな…、解ったな影綱ン」
影綱は無言のまま、頷くと、己の体を弄ぶ相手の背中に両腕をまわした。

影竜　4

宗実との手合せの回数が重なるにつれ、徐々にその頭角を見せ始めた景綱。若年故の体格差でいつも負けるのだが、それでも、少しずつ着実に景綱の腕は上達していった。

当然、当初は余裕を見せていた筈の宗実も、数を重ねるたびに余裕がなくなっていくのを自覚した。かわしきれずに打たれ込まれていた影綱が、次の手合せでは、木刀で払いのけてみせる。そして、その次の手合せでは、難なく体を翻して反撃に出てくるほどであった。

（飲み込みが早すぎるぜ、全く…）

宗実は、彼の素質を垣間見た。

（抜かれる日は、そう遠くはない…、か…）

そう感じても、なぜか宗実は焦り一つ感じなかった。

（殿のお考えにも…、頷ける所があるなあ…）

しっかりと、昨夜のうちに宗実は釘を刺されていたのであった。閨での主の様子を思い浮かべながら、知らずに笑みを浮かべていた。

「あまり…、無体な事は致すなよ、宗実。…あれは、いずれ伊達家家臣の一門として取り立てるのだから…。」

宗実を組み敷きながらの輝宗の言葉。神職の家柄にもかかわらず、家臣として取り立てようとは…、よほど影綱が気に入ったらしい。

（…そして、俺自身も…、か…）

思い出しに、顔が歪むと、影綱が不審そうな目つきで睨みつけてきた。

「宗実殿。…どうかいたしましたか？」

「いや、ちょっとな…、すまん影綱。もう一度仕切り直しだ…」

云いながらも、その日、宗実の思い出し笑いは止まらなかった。

徐々に二人の立ち会いは真剣勝負の様相を見せるようになっていった。
その様子を微笑ましくも見守る視線があった。輝宗を含む、他の伊達武将達である。そしていつしか、手の開いた武将たちも、その鍛錬に顔を見せるようになっていった。特に、留守・鬼庭・遠藤らはこぞって二人の鍛錬に参加するようになっていた。
宗実が不在の時ですらも、景綱は鍛錬場へと足を運ぶ。影綱自身が、自ら課した日課として…。そう、むしろ焦りを感じていたのは、影綱自身であった。武家出身とは異なった登用である事を、痛いほど感じた故の日課。自分を気に入って、推挙してくれる者に対する礼儀として、無様な姿は見せたくないと…。そうやって余程の事情がない限り、鍛錬は毎日のように続けられた。
そんな姿の影綱を慕ってか…、中には参加を申し出る小姓衆も出て来た程。そして、いつの間にかその鍛錬の時間は、小姓衆の日課と意識づけられる程になっていた。時には、輝宗自らその鍛錬に付き合う事もあった程だった。
とはいえ、さすがに「当直番」や「不寝番」の翌日は鍛錬を休みがちになっていた。まず、怪我を危惧する宗実や輝宗自らの言い渡しもあったのだが、それ以上に景綱自身の問題もあった。
最初の夜程ではないにしろ、輝宗の相手を務めた後はどうしても体を動かす事が辛いのである。体にかかる不可が大きすぎる為か、まともに歩く事も億劫な程であった。内情を知る宗実はともかく、他の小姓衆には知らぬ内容。誘いが来ると体を引き摺ってでも鍛錬場に出て来る景綱の姿があった。そんな性格を見越してか、輝宗自ら鍛錬場の前で景綱を追い返す事もしばしば見られた程だった。
そんな状況が続いた、とある日の夜、輝宗は景綱を呼び出した。
「強情を張るのも大概にせんか」
叱責を受けて、ひれ伏しながらも、
「折角、皆が誘って来るものを、無下に断る事も出来ませぬ。御館様の楯になるべく、皆気持ちは一緒なのですから…。それに、戦場

であれば、そのような事も言っていられない筈です。」
と、食いさがって来る有様。
ここは戦場ではない――――、と言ってみても、景綱の気性では納得する訳もなかった。
溜め息の混じる輝宗の呟き。
「…少々、手加減し過ぎたのかも知れんな」
言うが早いか、輝宗は引き摺るようにして景綱を自身の寝所に放り込んだ。
「ならば今宵よりは、遠慮はしない。…景綱、覚悟するが良い」
怯えも出せぬまま、景綱は組み敷かれた。それ以上の言葉もないままに、輝宗は景綱へと覆いかぶさっていく。激しい口合わせに景綱の息も次第に乱れていった。
肌を這う、滑った感触に景綱の皮膚は粟立つ。怯えと、それ以外の感覚。鼓動が早鐘のように打ち始めるのを感じながら、息は乱れてった。まさに、容赦のない愛撫。経験の少ない景綱にとっては、拷問に等しいその感覚。声を抑えることすら出来なくなっていく。直接の刺激さえ受けていないというのに、景綱の半身は見事なまでに形を変え、喜悦の涙さえ浮かべていた。
「…もう、…御館様、これ以上は…」
か細い声が零れていく。
すでに、慣らされたその行為に、景綱の体は反応を示している。
が、輝宗は、一向にそれ以上の刺激を与えてはくれない。あと少しだけ、ほんのちょっと触れてさえくれれば、終わりをみる事が出来るのに…。懇願の言葉さえ、輝宗は聞き入れてはくれない。はしたなく揺れだしてしまう腰先に、己の浅ましさを垣間見るようで、景綱は涙をこぼした。
「この程度で、泣かれてもなぁ…、もう我慢できんか」
輝宗の耳元での囁きに、景綱は激しく頷く。
輝宗の手が、己の物を握ったとき、景綱は安堵のため息を漏らした。が、それは次の瞬間悲鳴へと変わった。

「くううっ…、ひいっ…」
根元を絞められた苦痛。それ以上に、景綱を驚愕させたのは、予期せぬ部分での痛み。引き攣るような疼痛。声も出せず、景綱は身を捩った。
「これ、暴れるな…。これでは、お前が辛くなるだけだぞ…」
輝宗の声が、わずかな笑みを含んでいた。
「ひいいいっ、…い…たっ…、はうっ」
輝宗の指先が動くたびに、景綱の口からは悲鳴だけしかこぼれない。喜悦の兆しを見せていた半身ですらも、今はぐったりと露を零しながらもうなだれている。
景綱は、ただ、その痛みから逃れることしか考えられなくなっていた。
じたばたともがく景綱を抑え込みながら、それでも輝宗は咥えさせた指根を動かし続ける。
「嫌あああ…、えうっ…、離してええ、止めてよおおお…」
相手が、誰なのかすらも忘れたように、景綱は激しく目の前の男の背中を打ち続ける。まるで、子供のように、しゃくりあげながら…。
一向に緩む気配を見せない、景綱の後孔に苛立ったか、輝宗は部屋の外へと声をかけた。
「宗実…」
静かに、歩み寄るその男の影に、輝宗は助けを求めた。が、目の前の男は優しく微笑むだけだった。
「ここに…」
そう答えると、宗実は何かを輝宗へと差し出す。それを受け取るために、緩んだ戒め。幸いと、景綱は体をよじって輝宗の下から這い出そうとした。
「ダメだなあ…、景綱。」
宗実は、苦笑いのまま、景綱の両腕を抑え込んだ。ちょうど、うつぶせの状態のままで。

「そのままで、宗実」
輝宗の言葉に小さく頷いて見せる彼の表情に、景綱は絶望的な思いでいっぱいになった。
「御館様の所望である…。景綱、勤めを果せ」
宗実の優しい口調にも、景綱は激しくかぶりを振った。
が、次に襲ってきたのは滑りを伴って捩じり込まれる灼熱の大きな塊。尻を持ち上げられる姿勢で、その塊は、容赦なく景綱の狭い尻穴を抉じ開けていく。襲い来る痛みに、声も出せたもんではない。抑えられた両腕を解放された事もわからぬまま、景綱の指先は白く変わるほど握りしめられていた。
体を持ち上げられる事で、より結合は深くなっていく。息をすることもままならぬ状態で、開け放たれた口元からはだらしなく涎が零れおちる。
「もう少しだ、…景綱」
目の前の男の声も、もはや景綱には届いていない。
完全に抱き起こされ、輝宗の腰上に座らされた時には、酸欠の金魚のような有様。
「もう少し、慣らしてやってからとも、思ったが…。…中々、そそる顔をするもんだな…」
背後の男の言葉も、景綱にははるか遠くから聞こえてくるような感覚であった。
緩めてみよ…、そう背後から囁かれても、全く経験のない景綱にとっては、今の状態ですら許容範囲を超えているのである。少しでも、体を動かせば、引き裂かれるような痛みが走る。相手の、息使いですら、痛みを呼ぶのである。
「…お…願い、もう…、許…し…てぇ……」
「辛いのか…、景綱。」
目の前の男が優しく微笑む。許しを願って指し伸ばされた両手を握り返す宗実。なにがしかの目くばせの後、宗実はその身を屈めた。
その後に感じた、思いもかけぬ場所からの他人の吐息。景綱はた

だ、苦痛と快楽の狭間をいききするだけ。初めての激しすぎる感覚に、徐々に思考は白んでいった。息も満足にできない程、その身を蹂躙され続けた。まさに、意識そのものが闇に溶けてしまうまで。

翌日、景綱が自室から出られなくなっているのを良いことに、輝宗からはっきりした通達が出された。

［当直番］［不寝番］明けの者、鍛錬場への出入りを禁ずる――――、と。

影竜　5

輝宗が正室をむかえて早三年の月日が経とうと言う頃、景綱にとっては驚きの情報が飛び込んできた。まさかの人が、この屋敷にやって来ると言う。

景綱にとっては、苦手な部類の人種であった。ある意味で、御館様以上に逆らえない相手が側上がりすると言う。義姉喜多が、乳母として召し抱えられる事になったのだ。

出産間近の義姫は、まだ承伏していないと言う話らしいが、城主の意向となれば、従うしかない。波乱含みの人事だと城内では持ちきりだったが、景綱の希有は別の所にあった。

義姉の性格を嫌が上にも熟知している景綱にとって、気性の似通っている義姫様との間に悶着でも起こすのではないかと心配していたのである。

しかしながら、当の喜多はというと

「小十郎、御館の中を案内して頂戴。早く慣れないといけないでしょう」

と、景綱の所用も何のそので、そう言い渡して来た。

小競り合い程度の戦とは言え、それなりの戦果を積み、徐々に頭角を見せ始めた矢先の事である。まるで小間使いの様に、所用を言いつけて来る様は、他の武将の笑いを誘った。「小十郎殿は、殿と喜多殿には頭が上がらないらしい」と。

しかも、しきりと喜多が「小十郎、小十郎」と呼ぶものだから、他の武将達の中でもしっかり『小十郎』という呼び名が定着してしまった。

兎も角、今は小姓頭としての責務も在る身。そう易々と、義姉の言うなりにもなっていられない状況。暗にそう申し出れば、これ見よがしに、余計に所要を言いつけてくる相手。一筋縄ではいきそうもない相手に、いつしか景綱の苛立ちも募るばかり。ついつい、注

意力も散漫になりがちだった。
「景綱も、気に入らんようだな…」
呼ばれた閨で、唐突に輝宗が呟いた。
「そう云う訳では…、ただ…」
「ただ…、なんだ？」
抱き留められた状態で、言葉を捜した。流石に、苦手な相手だからとは言えなかったのである。
なかなか、次の言葉を言い出せないでいる景綱に
「…まあ、今は良いか」
と、事を急かしてくる輝宗。そのまま、流されるように景綱は、目を閉じた。未だに慣れる事の出来ない閨事。それでも、景綱は輝宗の言葉のままに体の力を抜いていった。

正式の場で、喜多は嫡子の乳母として任命された。
それを不服と、その場に義姫の姿はなかった。
乳母との対面の席。景綱も輝宗の傍に控えていた。景綱にとっても初の対面。女官に抱かれて現れた赤子は、まさしく輝宗の面影を写していた。
「これが、嫡子の梵天丸だ。」
赤子を受け取った輝宗が誇らしげに言った。
「いずれ、先代の大善大夫［政宗］の名を継がせようと思う」
赤子を任された、喜多は大事そうに抱きとめた。
「わが身に変えましても、大切にお世話さて頂きまする。」
僅かだが、気丈な義姉の指先が震えていた。
何事もなく、健やかな成長を見せる梵天丸。景綱自身、何かにつけては度々喜多の元を訪れるようになっていた。
いつもの、用事伺いと他の武将もそれを咎める事はなかった。むしろ、閨の間では、輝宗自身も我が子の成長ぶりを、景綱から聞かされる事を楽しみに思っていた程であった。
だが、突然不運は訪れるもの。

昼間、いつもと変わらぬ、やんちゃぶりを発揮していた梵天丸であったが、夕刻頃より徐々に様子が変わって来たのであった。
夕餉の様子が気にかかった景綱は、それとなく、梵天丸の部屋の前を通った。中からは、いつもと違う雰囲気が漂っている。ひそひそと囁く女官の声に交じって、義姉喜多の重苦しい息使いを感じたのだ。
「義姉上様…」
襖越しに声をかけた途端に
「入るでない、小十郎。」
喜多の怒声が飛んだ。
「お前は、入るでない…。それより小十郎。御館様は、未だお戻りにならぬのか？」
緊張を含んでいる声が震えていた。
「…いま、暫くは。それより、何かあったのですか？」
「小十郎、御館様戻り次第すぐに連絡を…。喜多が急ぎの用があると伝えてくれ…。」
景綱が返事をせずにいると、「さあ、行け」と喜多がその場から追い返すような勢いで続けた。
事の次第が分からぬまま、景綱は輝宗の帰城をまった。
先の小競り合いの後始末の為、この数日輝宗は城を開けていたのである。そして、義姫の姿も先刻よりこの城の中にはない。
喜多の取り乱し様から言って、嫡子・梵天丸に何事かの大事が起きた事に間違いはないのであろう。しかし、景綱には、その中身すら知る事は出来なかった。
出立の日数から言っても、そろそろ輝宗が戻っては来る頃なのだが、いくらなんでもこの夜半に帰城する事はあり得ない。ただ、それでも何をする事なく、無意味な時間を潰すぐらいなら、と罵声を浴びせられるのを覚悟で再度喜多の元に戻った。
「義姉上様…」
「何しにきた、お前はここに来るなと言ったであろうに」

「火急の用向きなれば、この小十郎が御館様の元にお知らせに参ります。何があったのかだけでも、教えては下さらぬのですか？」
「…義姫様不在の今、そうするより方法がないのかも知れませんね」
襖の開く音に、景綱は身を正した。
面やつれた喜多の表情。ためらいがちに、それでもハッキリとした口調で「他言無用」と言い放った。
耳打ちされた内容に、景綱の表情は驚愕に変わった。
「他の、武将衆が出払っている今。これを頼めるのは、確かにお前しかいない。なるべく早く、気取られる事なく殿に伝えてくれようか？」
心配そうに、景綱の顔を覗き込む喜多。
「小十郎、参る」
気合いをかけるかの様に、喜多に向ってそう告げると、景綱は急ぎ厩へと向かった。
闇夜に乗じての、戦場への早掛け。敵に知られる事なく主の元に情報を届ける役目。しかも、この場合、敵は内部にも存在していた。
喜多の存在を良くは思っていない義姫側の武将達である。ただでさえ、一つ違いの弟君を溺愛している義姫側にこの事態を知られれば、後々面倒な事になって来るのは目に見えている。
そんな考えを走らせながらも、小十郎は足の速い軍馬に跨った。ある意味で、今回の戦に参戦できなかった事は不幸中の幸いとも言えたのかも知れない。なぜか、今回ばかりは城の留守居役と命ぜられ、他の武将の前で、不服申し立てをしていたのであった。それでも、輝宗は、「今回ばかりは連れては行けぬ」と、苦笑いを浮かべていたのだ。輝宗との閨の中ですら、同じように食い下がった景綱。「今回は、大した戦でもない。たまには、義姉上にでも、甘えるが良い」そう言った輝宗の顔が浮かんできた。
思い出に浸っている場合ではないと、景綱は馬に鞭をあてる。降り落とさんばかりの勢いで駆け抜ける駿馬。半ばしがみ付くような体勢で、風圧から身を守る。暫く走ると、見覚えのある陣幕が迫っ

て来た。
ただならぬ気配を感じた、武将達が蹄の音のする方へと終結しはじめる。
（このままでは、拙い）
咄嗟に、景綱は手綱を引き、馬の歩速を緩めていった。
「こんな時分に何事か？」
景綱の前に飛び出して来たのは宗実。
馬から飛び降り、ひれ伏す景綱。
しかし、その景綱の顔を見るや
「御館様の言い付けを破ってまで、この場に参じるとは！」
容赦のない叱責。
「御館様に、急ぎお知らせしたい事あれば…、どうかお取り次を…」
ただならぬ光景に、他の武将たちも集まり始めた。見渡せば、いずれも鍛錬場での見知った顔。ただ、その中にも警戒しなければならない相手も確かにあった。
「この様な時分に、何の要件じゃ。…取り次いでやらぬこともないが…。」
老将の言葉におもわず景綱は顔を見上げた。
言えば、全ての者に晒されてしまう事を危惧してか、
「内密の義あれば…」
と、景綱の言葉切れが悪くなった。
要領を得ない景綱の言葉に苛立ったか、宗実。
「御館様の言い付けを守れぬ者が、何の用だ。親恋しいばかりに、その使命を投げだすような奴とは思わなんだ」
「…」
「その様な腑抜けに我が後を任せるわけにはいかん。…今ここで成敗してくれる」
いまにも帯剣を抜かん勢いで、景綱に詰め寄った。
「まあまあ、白石の…。殿恋しさとはいえ、この駿馬、乗りこなして来た度量は認めてやらんか。…さあ、小十郎。殿はあすこの陣幕

におわす。一目まみえれば、すぐにでも帰ろう?……さあ、白石の、案内してやらんか」
這いつくばっている景綱を抱き起こしながら、老将鬼庭が言った。渋々の体で宗実は幕屋に景綱を引き摺るようにしていった。その間も、悪態をつく事を止めずにである。
「御館様、お情け欲しさに虚け者が参っております。いかがいたしましょうや…」
流石の景綱も、この物言いには頬を赤く染めた。
輝宗を取り囲んでいた武将も、思わずの失笑を隠そうともしない。
謂れもない恥かしめを受けた事に、景綱の握りしめた拳が震え出した。
「先の騒ぎはお前か、景綱。…まあ、仕方なし。皆は戻って休め。」
輝宗の言葉に、次々と幕屋を後にする武将達。その甲冑の音が遠ざかっても、景綱は身動きする事が出来なかった。
「馬鹿者、何をしておる。とっとと御館様の傍に行かんか。…人払いしたかったんだろうが」
宗実が、景綱の背後を後押しした。去り際の宗実の表情からは、先程の厳しさは消えていた。
二人残されても、尚、景綱は言葉を出す事が出来なかった。何を、どう説明すべきなのか、浮かんでこなかったのである。
「こい、景綱」
優しい口調に引かれるように、ゆっくりと輝宗のもとに歩みを進めた。
手を引かれ、輝宗の上に座らされたのである。
「何があった、申してみよ」
輝宗の優しい抱擁に包まれながら、一つずつ言葉を重ねていく景綱。
要領を得ないかも知れない。そう思いつつ、輝宗の陣羽織を握り締める手の震えを止める事は出来なかった。

影竜　6

輝宗、宗実との三騎掛けで戻った城。馬を下りてからも、誰もその口を開こうとはしなかった。

景綱の報告を受けてからの輝宗の行動は早かった。ほぼ掃討戦とはいえ、総大将が戦列を離れるのである。替りの指揮官を任命し、秘密裏に陣を抜け出す三人。後を任された鬼庭は、「降り落とされるなよ、小十郎」と見送ってくれた。遅れまいと、必死に手綱を握る景綱を、時折宗実が振り返る。初めての輝宗との早掛けに付いていくのがやっとの景綱であった。

着くとすぐに輝宗は城内を目指す。それを見ながら、宗実と共に厩に向かう景綱。その両手には鈍い痺れすら残っていた。

「よくまあ、一大事とは言えなあ。…コイツを乗りこなせたもんだよ。」

早掛けの三騎馬の手入れをしながら、宗実は景綱に声をかけてきた。

ことのほか、優しい口調に思わず景綱は相手の方を凝視してしまっていた。

「先は済まんかった。…ああでも言わねば、人払い叶わぬ身ゆえ、許せ。」

内容は知らずとも、只ならぬ気配を感じ取ってくれたゆえの芝居事。それに、老将鬼庭が乗ってくれたと言うわけだった。誰が敵かもはっきりしない中では、仕方もない事。それでも、武将達から浴びせられた冷笑には、耐え切れぬ想いが込み上げて来る。今更ながらに、受けた恥ずかしめを思い出して、涙が零れた。

「明ければ、事実も知れよう。詰らぬ小芝居を…と、悔しがる者も出て来るに違いない。」

立ちつくしたままの景綱の体を抱き締めてきた。

「どうせならば、あの時にこの顔を見せれば良かったものを…。よ

り、効果的だったろうに…」
頬を伝う雫を、宗実の舌先が拭いとった。
「殿のお気に入りでなければ、俺が念者と名乗り上げるものをな…。」
微かに唇が触れただけ。
緊張を走らせた景綱の体を強く抱き締めた後、
「…ここは、もう良いから行け。…気になるんだろう」
と、その体から離れて行った。

夜が明けても、一向に事態の進展はなかった。いや、むしろ悪くなったとさえいえる。梵天丸の容体は一進一退を繰り返していた。明け方近くに戻った義姫でさえ面会を拒まれたという。今、彼の部屋に立ち入りできるのは、喜多をはじめとするお付き女官と輝宗だけ。部屋の外で待機していた宗実と景綱も、所払いを言い渡された。それも、梵天丸の部屋のある西館に立ち入ることも禁じられたのだった。早朝より、坊主どもの加持祈祷の声が響く中で二人は無言のままだった。
「疱瘡とはな…。下手すると…」
言葉を続けようとした宗実を、睨みつけた景綱。
「何を言われる！若様はきっと良くおなりに…。きっとまた、お元気な姿で…」
「…すまん、景綱。不謹慎だった」
涙を堪える景綱に、頭を下げる宗実。
だが、胸中は二人共同じだった。
この時代、疱瘡を患えば、命を失うこともしばしばあった。特に体力のないものが患ってしまえば、命を失わなくとも廃人寸前になりかねなかったのである。まして梵天丸は齢四つ。どう考えても、無事に生還できる確率は極めて低かったのである。当然二人の脳裏には「廃嫡」の言葉が浮かぶ。

「…きっと、…またきっと、お元気な姿を…」
声を震わせながら、景綱は繰り返した。こぼれる涙をそのままに、膝の上で握りしめた拳を震わせた。
「…ああ、そうだな。きっと、また、やんちゃなお姿を見せてくれるはずさ」
宗実は言うと、景綱の体を抱きしめた。ただ、そのまま時間だけが過ぎて行ったのだった。

続々と、戦場から戻った武将たちが集まる。ただ、無言のままで。戦装束をといただけで、誰が促すわけでもないのに広間に詰める武将たち。重苦しい空気が流れる中、面やつれた主が上座に腰を据えた。
「…折角の勝ち戦なのにな。すまん皆の者…」
対坐する武将たちに頭を垂れる輝宗。
彼のそばに詰める景綱は、それを複雑な思いで見つめ続けた。
「ご容態は、いかに…」
老将鬼庭の問いかけに、暫しの沈黙で答えた輝宗。
「…疱瘡ゆえ、…どうにも」
ざわめく武将たち。
「若様次第……、と、いうことですかな」
皆の胸中を代弁するかのように鬼庭が続けた。
「まあ、そういう事だ。…今日明日が峠となろう」
輝宗の言葉に、座から溜息がこぼれた。
座の解散を申しつけた後、景綱にも二三日の暇が言い渡された。
暇を出されても、景綱には行く場所も思いつかなかった。生家に戻る事も出来るのだが、あえて城内の自室に引きこもったのだった。何もできなくとも、せめて同じ館内に居たい――。やんちゃな梵天丸の姿を思い出すたび、感じた思いだった。
「…辛気臭いぞ、景綱。」
その声に、景綱は視線を移した。

「せっかくの、宿下がりの機会に何してるんだ」
宗実の言葉に唖然としていると、引きずられるようにして部屋を連れ出されたのであった。
「なにを…。どこへ、行こうというのです、宗実殿」
「なぁに、大した所ではないさね…」
無理やりに連れ出された先は、白石家の屋敷。
不満げな景綱を前に、宗実はにやにやと笑顔をこぼす。
「なに、殿も知っていることさね。…館から連れ出せ、と命じられたもんでね。」
夕餉の膳を運びいれた女中が居なくなった途端の言葉。
「しかし、宗実殿…」
「まあ、夜が明けるまではここに居ろや。…どうせ、あすこに居たって、眠れるわけでもあるまいしな」
勧められる杯を手にしても中々口をつけられない景綱。
「飲めねば、飲ませてやろうか？口移しで…」
いつの間にか、宗実がすぐそばに来ていたのも気が付かない程、景綱の心は囚われていたのだ。
「なにを、ふざけたことを…」
「こんな機会、滅多にあるわけでもないからな。…いくら、嗜みとはいえ、気に入らん者には、こうしたいとは思わんさ」
覆いかぶさるようにして、景綱の唇を蹂躙する宗実。
その手管ゆえか、なんなのか。景綱は抵抗する事ができなかった。
「どうせ、眠れんのだろ…。眠れるようにしてやるから…」
抱き崩され、解かれる帯の音を遠い感覚の中で聞くかのように景綱は眼を閉じた。

数日を経て、梵天丸の容体は小康状態に向かった。熱も下がり、徐々に意識も取り戻しつつあった。
やっと、梵天丸の部屋への入室も解禁されたある日。喜多が景綱の元を訪れたのだった。

「何を、難しい顔をしておいでです。…義姉上。」
ちょこんと、部屋の中央に座り込んだかと思うと、俯いたまま何も言わない喜多に少なからず苛立ちを感じた。いつもならば、こちらの倍以上言い返すほどの気性の持ち主が、何を聞いても生返事しか返さないのである。
「いったい、何があったというのです。義姉上！」
思わず、声を荒げてしまった景綱であったが、それにやっと反応するかのような喜多。
「ああ…、あのね小十郎。若様もそろそろ、床離れできる頃だと思おうから…。あの…、お顔をね…。」
いつもらしくない喜多の姿に、つい景綱はため息をついた。
「それだけ言うために、ここに来たんですか？…他にも、何か御用があるんでは、ないのですか？」
「……やっぱり、今度。また今度にするから…。ごめんね、小十郎。お役目前の貴重な時間に…」
おぼつかない足取りで、景綱の部屋を後にした喜多。その姿を目で追いながらも、景綱は夜番の準備へととりかかったのであった。
日中の喜多の行動に得心がいったのは、輝宗からその話を聞かされた時だった。輝宗の腕の中で、景綱は笑いを堪え切れずに体を震わせた。
「そんなに、変な話だったかの…。まだ、喜多とて若い身空で寡婦のままともいかんだろうしなあ…。」
夫子供を亡くして早四年。ちょうど、梵天丸の乳母として傍上がりする直前の事故。未だ独り身の彼女には、たぶん思い人がいるに違いない。そう、景綱は確信していたのであった。伊達家に仕えるようになってからも、何人かの武将から、それとない誘いを受けていた事も景綱は知っていた。それを、片っぱしから袖にしていたのは、何あろう喜多自身。そして、その相手が誰なのかすら、景綱には見当が付いていた。そして、その相手は全く気付いていないということも。

「そんなに可笑しいか、ん、景綱。」
笑いを堪える景綱を組み敷くように覆いかぶさってくる輝宗。
「…いえ、たぶんですが…。……義姉には、思い人でもいるんではないかと。だから、御館様からのお話を…。」
再度の挑みに景綱の声も途切れる。
「いい話だとは、思わんのか。お前は…」
「義姉が…、良ければ…。再婚など、…本人の気持ち次第なのでは」
ゆっくりと、息をつきながら輝宗を受け入れる。すでに、慣らされた行為とはいえ、未だに体に加わる負担は相当のもの。苦痛に顔を歪めながらも、景綱は圧し掛かる男の体に腕をまわした。義姉に対する思いを抱いたままで。

数日後、いつもと変わりない義姉の元気な声が館の中に響き渡る。再婚話をきっぱりと断ってきたと、景綱の部屋で大泣きしたのはつい先日の事。その時に、喜多自身の口から思い人の名を聞かされたのであった。複雑な思いに包まれながらも、泣き崩れる喜多を無言で抱きしめ続けた景綱。
「男であったならば、いつも傍でお仕えできるものを…」
と、声を震わせてつぶやくその姿。
「おなごならば、いつか子を生すことも可能でありましょうや。」
そんな、言葉しか出てこない自分が腹立たしかった。景綱自身の立場では、それ以上の慰めは出てこなかったのである。
当然、喜多とてそんなことは百も承知。
「出来るものなら、お前と換わりたい…。出来ぬこの身が、口惜しい…」
そう言って、ますます泣き崩れるのであった。
そうして、夜遅くに喜多は部屋から出て行った。もやもやした気持ちを抱えたまま、景綱自身明け方まで眠ることなどできなかった。それなのに…。

夜が明けてみれば、いつもと変わらぬ喜多の声が響いている。
「おなごとは…、こうまで強いものなのだろうか…」
その姿を見て、景綱はひとり呟いた。

それから数年を経て、義姉弟共々、正式に梵天丸の守り役に任命された。ただ、この人事を推したのは何を隠そう、喜多に袖にされた武将たちであった。彼らの真意はどこにあるのか、未だ持って不明なままである。

影竜　6（後書き）

「影竜」は、これで終了です。

初めて書いた時代小説がこの作品。皆様のご意見ご感想を聞かせてくだされば、今後の参考に致します。誤字脱字等は修正したつもりではありますが、発見の際にはご一報くだされば幸いに思います。

こちらの作品はシリーズモノです。

次のサブタイトルから、また別の話になります。

花宴（前書き）

伊達藩主　輝宗から政宗にかけての「伊達家」関連の小説シリーズです。
今回は、梵天丸・時宗丸・小十郎・宗実と言った人物が登場致します。
衆道系時代小説ですので、大丈夫な方だけお進みください。

なお、史実とは明らかに異なっている部分が存在します。
作者の意図する部分でもありますので、そのあたりはご了承ください。
飽くまでもフィクション時代小説です。
史実上の事件・人物・場所・団体などとは、全く関係の無い作者妄想の産物であります。

花宴

「時宗丸(ときむねまる)、梵(ぼん)はどこにいる」
庭の桜の木によじ登っているやんちゃ坊主に男が声をかけた。
「…知るもんか、あんな弱虫なんか」
ぷいっとそっぽを向く仕草。こちらが、誰であろうと関係ないと云う素振り。顔を紅潮させているところをみると、どうやら一悶着あったらしい。
(まあ、いつもの事なんだが…)
桜の木の真下で、男はため息をついた。
せっかくの日和。子守に翻弄される小十郎を引っ張り出そうと、せっかくここまで来たのに…。肝心の、子守役が所在不明ときては…。
「さて、困ったな…」
「おっちゃん…まだなんか用か」
木の枝に跨りながらの見下ろし。ただし、おっちゃん呼ばわりされた方は、心なしか肩を落とした。
(…おめえらから見りゃ、そりゃオッサンだろうさっ)
間違いなく、御館様の血縁でなければ血を見る事になっただろう言い草。言った当の本人は悪びれた様子もない。子供の言い草に、一々腹を立てるのもどうか…、と気をお取り直して樹上のやんちゃ坊主に再び声をかけた。
「なら、小十郎はどこにいるか知ってるか」
「…どうせ、梵のとこだろっ。いっつも…、梵ばっか…」
ぐすんと、鼻をすすりあげる音が聞こえてきた。
(おやおや…。まあ、それは仕方ねえやな…)
小十郎が梵天丸(ぼんてんまる)にかまけてばかり居るんで、拗ねていると、男は解釈した。
「坊主、わりいが小十郎の所まで、案内してくれんか…。後で、良

いもんやるからさあ…」
「…なにくれる」
「そりゃあ、案内してくれたらってご褒美さ。…後からのお楽しみってな」
「ちゃちいモノだったら、許さねえから…」
云いながら、猿の子のようにするすると木から下りてきた。流石は実元（さねもと）の倭子。本来、輝宗（てるむね）とは従兄弟同士になるのだが…、如何せん年が離れすぎている為かむしろ梵天丸の従兄弟の様な存在になっていた。が、その血筋は争えない。幼子ながら、時々垣間見せる瞳の中の獰猛さ。（最も、輝宗がそんな目をする事は滅多にないのだが…）ふと重なる面影二つ。隠居殿と同じ気性の持ち主と見て取れた。
「では、お坊ちゃま。ご案内よろしくお願い奉ります…」
からかいを含んだ、男の言葉。
「…しかと、付いてまいれ。宗実殿（むねざね）」
年上の手下をもった事に気を良くしたのか、時宗丸は道先案内をかってでた。それに、相手が誰なのかは知っていたらしい言葉。宗実の言葉に、ちゃっかりと乗ってくるあたり、伊達者気質を垣間見たようだった。
（御館様の血筋って、結構な…）
主にも似た、この気転の速さ。からかい甲斐があると云うもの。この坊主らに翻弄される小十郎の姿が容易に想像できる。
（こんなの、二人もいたんじゃ、さぞかし難儀なこったろうさ…。…ホント、こっちにお鉢が廻ってこなくって助かったぜ…）
子供の歩みにしても、以外に早い。広い城内の庭を駆けずり回っているだけの事はある。何しろ、案内人は垣根だろうがなんだろうが、自分が通れる場所を潜り抜けようとする。が、こちらは大人。いくらなんでも、そんな真似は出来るはずない。仕方なく、先導する小猿をひょいっとつまみ上げた。
「なに、しやがる」

突然の出来事に、威嚇を見せる小猿。
「なあに、見失うと困るんでね…。悪いが失礼するよ」
云いながら、ひょいっと肩車の体勢。
「さて、若様。この馬めに命じて下され。…目標人物はいま何処に…」
その体勢で見上げれば、微かに頬を染めた時宗丸の顔。
「なんで、…こんなことする」
「なんでと云われてもなぁ…。まあ、やりたいからってのは駄目かい？」
「…俺、…こう云うの、初めてだから…。梵はよく小十郎にしてもらってるけどさ…」
「親父殿は…」
「…」
「そうか、そうか。…中々気持ち良いもんだろう」
うん、と小さな頷き。意外と素直な反応に、宗実は破顔して見せた。自然と上がる笑い声。その振動に時宗丸はしがみ付いてきた。
「…落ちるって」
「落ちねえよ。それに木の上よりは低いだろうさ」
「だけどよお…」
「落とさねえから、心配すんなって」
そんなやり取りをしながらも、時宗丸の案内のまま歩みを進めていく宗実。時々、わざと揺らしてそのしがみ付く様を楽しむと云う、底意地の悪さも見せながら…。
そこは、城庭の外れ近く。大きな沼のような池のほとり。水面に向かって膝を抱えて蹲っている梵天丸の傍らに、そっと姿勢も崩さず立っている若者。何やら近づきがたい雰囲気漂う中、頭上の小猿も急に大人しくなっていった。
「よう、小十郎」
「宗実殿…。この様な所に…、いかがなされた」
「まあ、使いっぱしりさ。…これ、受け取ってくれ」

顎でしゃくり上げる様に示した先。頭上の時宗丸に持たせていた荷物の事である。
「頭…、重くっていけねえや」
小十郎が受け取ったのを確認すると、今度は頭上の小猿が騒ぎ出した。
「…もう、降ろせよ。…早く」
焦れたようにじたばたするのを、小十郎がひょいと抱き上げた。その手を振り切るかのように、小走りに駆けだす姿。
「時宗…」
「って、良いから…。おめえは、こっち」
と、小十郎の襟首を掴んで引き摺るようにその場を離れる宗実。
「ちょ…、宗実殿。…何を」
「良いから、良いから」
子供二人の姿がかろうじて伺い見る事の出来る距離まで、離れたところで宗実は手を離した。
「良いから、暫く放って置けって。…餓鬼どもの喧嘩なんか、今更だろうが。…それより、あの小猿がなあ、おめえがあんまり梵ばっかり構うって…、拗ねてたぞ」
云いながら、宗実は小十郎に押し迫る。
手荷物を持った状態では、さしたる抵抗も出来ず、後ずさりするうちに、立木にぶつかった小十郎。
「…何を」
と、小十郎が反論しようとしたのを唇で塞ぐ。啄ばむ様な口合わせに、小十郎も観念したのかゆっくりとその目を閉じた。絡まりあう舌先。小十郎の鼻から抜ける様な微かな喘ぎ。すいっと、宗実は唇を解放した。
「こっちも、構ってくれねえと…、苛めんぞ」
耳元に囁くように語りかければ、小十郎は頬を染めて小さく身震いした。
「…そんな」

「まあ、使いの駄賃も貰ったことだし…。今のところは、これで勘弁してやるよ」
「…使いって、私は何も…」
「それ…、だ」
宗実は、小十郎の手の中の風呂敷包みを指差した。
「ほんと、喜多(きた)殿は人使いが荒い。…おめんとこ行くって聞いた途端に、これだあ…。持って行けとよ。まあ、普通の女官にゃ…、出来ねえ話だがなあ…」
「…すいません。義姉が…」
「まあ、良いってことよ。…餓鬼どものおやつなんだろうがなあ…」
はあ、と気の無い返事を返してよこす小十郎。中身を確認する事もなく、ただ、目の前の男を見つめ返しているだけだった。
「まあ、良い雰囲気なんだけどなあ…。邪魔もんさえいなきゃあなあ…」
宗実は、小十郎の頬に軽く唇を寄せただけですぐにその体を離した。その間にも、小声での今宵の約束は取り付ける手際の良さであったが…。
「おっさん二人で、そこで何してんだよ」
「おめえなあ…。って、仲直りすんだんか…」
時宗丸に手をひかれる形で、後ろから梵天丸が付いてきていた。
「…まあな。でさ、もう一遍、あれ、やってくんねえか?」
「なに、肩車か…。別にいいけどなあ…」
と、小十郎の方を見ると、いかにも呆れたような表情を浮かべていた。
「よっしゃっ。…で、どっちが乗るんだ」
「そんなの、俺に決まってんじゃねえかよ。梵は、小十郎なっ」
「はあっ」
「馬だよ、馬。…早くしろよ、小十郎」
宗実は、笑いをこらえながら、梵天丸の体を抱き上げ、小十郎の上に乗せてやった。

「で、…これもっ」
と、時宗丸は小十郎の手の中から荷物を取り上げ、宗実に手渡した。それを、梵天丸に手渡すと、しっかりと抱き込んだ。どうやら、なにがしかの打ち合わせがあったらしい。
「で、時宗丸」
屈んでやると、嬉しそうに飛び乗ってきた。まさに、小猿のように。
「で、何処に行けば宜しいんで…」
と、頭上の時宗丸に伺いを立てれば、
「さっきんとこ。花見しようぜ、みんなでさあ…」
「だ、そうだ。…馬小十郎、行くぞ」
小十郎は、深いため息をついて見せた。
「…すいません、宗実殿。こんな事につき合わせてしまって…」
「まあ、良いってことよ。…後で駄賃も貰える事だしなぁ…」
その言葉に、小十郎の頬がほんのりと染まった。
「なあ、おっさん。…早く行こうぜ」
急かす餓鬼二人を乗せて、小十郎と宗実は並んで歩きだした。頭上で餓鬼どもが、何やら言葉を交わしている。眺めがどうのとか、何が見えるとか…、
さっきまでの喧嘩がまるで嘘のようだった。

時宗丸と最初に出くわした桜の木の下。喜多の持たせた包みを開けば、見事なほどの団子の山。そして添えられた竹筒の中身はお茶。見事なほどの、花見仕様。
（どうりで、重かったわけだ…）
宗実は、思い出し笑いを浮かべた。小十郎に並ぶように腰をおろした目の前では、餓鬼二人が戯れている。
「やんちゃ坊主二人…、大変だなあ、小十郎」
「…まあ、これもお役目ですから…」
そう答えながらも、小十郎の二人を見つめる瞳は優しさを纏って

いた。
「お役目ねえ…」
宗実は、そのまま、その場に横になる。
「おっさん、もう疲れたのかい。…だらしねえなあ」
云いながら時宗丸が、駆け寄ってきた。その後を、真似するように梵天丸も続く。
「おめえ等ほど、若くねえからなあ…」
「そっか…」
と、その隣に時宗丸も寝転んだ。そして、梵天丸も…。
「でも、おっさん。…強いんだろ。…俺も、早くそうなりてぇ…」
「なんでだ」
「…そしたら、梵守ってやれんだろ…」
云いながら、時宗丸は、梵天丸を引き寄せた。
「…なんだ、そういう事か…」
宗実は、声をあげて笑った。
その隣では、小十郎が複雑そうな表情を浮かべている。
「大切なもん、守りたかったら…。稽古しっかりせんとな…。なぁ、小十郎」
急にふられた小十郎は頭を抱えた。
(好きなもん程、苛めたいって事だったとはな…。まさに、餓鬼の発想だねえ…。)
「…俺よか、小十郎の方が強いぜ。なあ、小十郎」
「何を…。宗実殿」
赤面した様子で、小十郎が宗実に詰め寄った。
「嘘…、本当か。それって…」
飛び起きて、小十郎の方を睨みつける時宗丸。
「そうさ…。俺なんか足元にも及ばんぜ」
火に油を注ぐかのように、宗実はけしかけた。
「やめて下さい、宗実殿！」
この際、小十郎の抗議は無視とばかりに、時宗丸を云い含めた。

「小十郎に勝てるようになりゃあ、伊達軍一の兵(つわもの)って事になるだろうなあ…」
「…絶対え、越えて見せらあ…」
小さな胸に闘志が沸くのを、宗実は面白そうに見つめた。
(しかし…、拗ねてた理由が、小十郎に対する嫉妬だったとはなぁ…)
うすら笑いを浮かべながら、宗実は降り落ちる桜の花びらを飽きることなく眺めたのであった。

花宴（後書き）

梵天丸と時宗丸、そして小十郎（景綱）と宗実と言うカップリングはいかがだったでしょうか？

時宗丸とはのちの「伊達成実」の事です。この、妄想時代小説における「伊達双璧」の位置関係はこんな感じでスタートを切ります。

のちに、茂庭綱元も出てくる話がありますので、間もなく「伊達三傑」そろい踏みとなる事でしょう。

この、妄想衆道小説に対する、ご意見・ご感想をお待ちいたします。

酒宴

「景綱…、この度の正月にあれを元服させるぞ」
閨での事、輝宗がそう耳元に囁いてきた。
「…あれ、とは…」
聞き返す小十郎の声が震えを帯びる。輝宗の閨の相手を務めながらでは、流石にまともな思考など浮かんでは来ない。
「梵天丸の事よ…。此度の情勢もあってな…。早々に戦場に立たせねばならん」
「…くふうっ。…そ、…それ程までに」
輝宗のきつい突き刺しに、声を乱れさせながらも、小十郎は話を続けようとした。
「…まあ、色々とな。…景綱、もう少し緩めよ」
「ふうっ…、ううん…」
緩い突き上げに、小十郎の口からは喘ぎ声が漏れた。
「…ですが、はうっ。…まだ、梵天丸様は…、はあん…ん…ん」
口を塞ぎにきた輝宗によって、それ以上の言葉は吸い取られてしまった。これ以上は詮索するなというような輝宗の突き上げに、小十郎はただしがみ付いて見せるだけ。夜更けと共に、肌のぶつかり合う音と、微かな喘ぎだけが部屋の中に響いていった。

開けて正月――――。
藤次郎政宗への元服の儀が執り行われる。口々に祝儀の言葉を述べる大人たちの表情は些か困惑を含んでいた。政宗の傍に控えるのは、小十郎と時宗丸。流石に、まだ、血族とは言え時宗丸の元服の話など出る筈もない。齢十になったばかりの政宗は、痛々しい程の幼さ。喜多が機転を利かせて、薄化粧を施しては有るのだが…。むしろ、時宗丸の方がやや大人びて見えるほどであった。が、城主の意向である為か、その不自然さを口に乗せる者など無く、儀式も終

盤にかかった。
次に控えているのは、お披露目の為の宴――。が、戦場からの一報の為に、それは執り行われることなく、すぐに軍議へと変更された。
当然のように乳母等の女官は退室を余儀なくされる。元服していない時宗丸もその一人。不機嫌さを隠さない時宗丸だが、流石に並みいる武将たちの前で駄々を捏ねる醜態だけは晒さなかった。が、替わりとばかりに、小十郎に向けて容赦のない視線を投げつけてよこしたのだ。ついっ、とそっぽを向くように視線を外すと、足音も高くその場から出ていった。その様子を、心配気に見つめる政宗。それを、脇から窘める様な口調で、一人の男が近づいてきた。
「若。…今は、軍議の方が大事ですぞ」
にやりとした表情を浮かべてそう言うのは、宗実。ちゃっかりと、時宗丸の開けた席を埋めてくる要領の良さに、反対側に居た小十郎は呆れ顔を向けた。
「…解っている。だが…」
「ご心配召されるな…、政宗様」
口籠る政宗に、小十郎が言葉を向けた。
「時宗丸とて、何れはこの中に入れるようになるのですから…」
「…ああ、そうだな…」
すいっ、と挙げられた政宗の表情は、きりりと引き締められた。軍議そのものに口出しできる立場には今は無い。だが、嫡子として元服した以上は、対面だけでも保たねばならない事を政宗は知っていたからである。
「…どうせ、この三人は蚊帳の外さ。…せいぜい、聞いている素振りを見せれば良いだけの事よ…」
宗実の小さな呟きに、政宗は口元を綻ばせた。
「…小十郎もそうなのか？」
小さく聞く政宗に、小十郎は頷きだけを返して見せた。そうか…、と呟く政宗。ひそひそと繰り広げられる三人の会話。どうやら、そ

れを輝宗が耳に留めたらしい。ちらりと視線を小十郎の方へと流してよこした。
「…まあ、とりあえず後は役目を分担するばかり。政宗」
「はい」
「お前は、もう下がっても良い。小十郎もな…。宗実は残れ」
嫌な表情を浮かべながらも、宗実は主の意向に従い、返事を返した。
退室に際して、輝宗が己の息子をいったん呼びとめた。手招きされるまま、政宗は輝宗の元に歩み寄る。
「何事で御座いましょうや、父上」
云うが早いか輝宗は政宗の体を抱きしめた。困惑した表情を浮かべる政宗に、輝宗は思いっきり頬ずりしたのだ。
「ちょっ…、父上」
「…黙っていろ、馬鹿が。…折角の元服の儀に、この様な茶々が入るとは思わなかったなあ」
一向に頬ずりを止めない輝宗に、困惑した面持ちのまま、政宗はもがいていた。
「…皆様の前です。…父上、おやめ下さい」
「わが子を可愛がって何が悪い。…もう少し、大人しくしておれんのか、お前は…」
まさに、溺愛を絵に描いたような輝宗の行動に、政宗の顔も赤らんでくる。周りの古参武将からは、押し殺しきれない笑い声が上がっていた。
「…殿、戯れもその位にしまして。…さあ、小十郎、政宗様を…」
そう言うは、鬼庭の老将。輝宗の手から、政宗を救い出す役目を担ったのは、これまた古参武将の基信。
「親子の触れ合いを邪魔しおって…」
膨れっ面をその二人に見せる輝宗であった。さあ、今のうちに――、と基信が小十郎に政宗を預けてよこす。笑いをかみ殺す二人を前に、輝宗はあからさまにブツブツとぼやいて見せた。

「捗りませんから…、これ以上は」
鬼庭の老将の言葉に、輝宗は不貞腐れた表情を向けながらも、手先で二人に行けと示した。退室の間際には、殊更大きな輝宗の溜息。軍議をしているはずの広間からは、暫くの間男達の笑い声が途絶えなかった。

政宗の自室に下がった二人を迎えた者。乳母の喜多が率いる女官たち。それぞれ伸びてくる手先に身を任せている政宗の衣裳が解かれていく。
「何やら、ずいぶん楽しげなお声が漏れておりましたが…」
喜多の声が、やや棘を含んでいた。
「…まあ、輝宗様がなあ」
「云うな、小十郎。…それは、言ってはならん」
小十郎の言葉を止めた政宗の顔は、仄かに朱に染まっていた。
「まあ、この喜多にも教えては下さらないのか」
わが子に相対するように、喜多は政宗の前に膝まづいて視線を合わせてきた。
「今は…、駄目だ。皆が居る…」
「では、後で教えて下さるか、この喜多にも…」
「…喜多になら、…後でな」
小さく呟く政宗を、喜多は思いっきり抱きしめた。
「約束でございますよ。政宗様」
「解ったから…、もう離せよっ」
乱暴にその腕を振りほどくその姿に、小十郎は先程の姿を思い浮かべて、押し殺した笑いを浮かべた。
「…何が、可笑しい、小十郎」
喜多の声が、小十郎を射抜く。思わず咳払いをして、誤魔化したのを、睨みつける様な視線が容赦なく降り注いだ。事、小十郎相手では、喜多の態度には容赦が見られない。そんな様子を、政宗は楽しそうに笑った。

「喧嘩は、駄目だぞ…。二人とも…」
「喧嘩にもなりませぬっ」
と、先に立ち上がったのは喜多の方。控えの間の襖を開け、何やら呼びいれる彼女。運び入れられたのは、宴の膳。
「奥方様の御計らいに御座いますれば…」
と、酒の席を設けたのだった。
女官に勧められるまま、おずおずと杯を傾けた政宗。途端にその頬が赤く染まった。はふっ、と吐き出したその姿。女官たちからは歓声の声が上がる。それに、気を良くしたのか、政宗は満面の笑みを湛えて見せた。
「…政宗様。ご無理を為さらない様…」
「…なにおぉ、お前だって飲んでるれはないか…、俺がのんれどこが悪いのら…」
すでに酔いの回った政宗の姿に、女官どもは嬉々とした笑顔を浮かべて喜んでいる有様。一番歓喜に身悶えているのは誰あろう、喜多自身。
飲み干した盃を喜多に向けると、飲めと政宗。それを嬉々として受け取っては、政宗の手酌酒を飲み干して見せる。
「義姉上…」
「…煩い、小十郎。…文句など言わせぬ。……はあい、政宗様…、お返しに御座いますれば…」
と、飲み干した盃を再び政宗の手の中に返す。輝宗に対する想いが、倒錯の世界を喜多に見せているようだった。想い人の面影のある幼子相手に、酔いに任せて想いを馳せる。それでなくとも、元々が整った顔立ちの上に薄化粧のまま。他の女官たちも、悪ふざけに拍車をかけていく。返杯に回される盃に一喜一憂する女官たち。その姿に、小十郎は頭を抱えたままだった。
「小十…、もっと飲め…」
「頂いてはおりますが…」
「じゃあ、なんでお前、酔わないんだようっ」

政宗の完全な絡み酒。すでに、瞳はとろんと酒精に犯され切っていた。
「…つまらん。…皆で、小じゅをつぶすのらああ」
と、政宗の掛け声に悪乗り女官たちは、一斉に小十郎の周りに侍り始めた。
「小十郎、よもやこの義姉の酒が飲めぬとは…、言わぬだろうなあ…」
喜多でさえこの調子。他の女官どもは、もっと悪乗りを見せる。その背後では、政宗が楽しげな笑い声をあげていた。が、突然宴はお開きとなる。原因は…
「…こじゅ、…気持ち、わるっ…」
突然吐き気を催す政宗を、小十郎は脱兎の勢いで外に連れ出した。その姿に背後からは黄色い歓声が上がったのは言うまでも無い。
庭に連れ出した途端に吐き出す政宗。その背中を優しく擦りながら、小十郎は声をかけた。
「…だから、ご無理をするなと、あれほど申し上げましたものを…」
「…だが、俺は早く大人にならねばならんのだろう。…もう、梵天丸のままでは居られないのだから…」
吐き上げる苦しさの為か…、違うのか。政宗の残された左の眼から一滴の涙が零れた。
「政宗様…。そう急がずとも、大人にはなれまする」
小十郎の慰めがどれほど利いているのか。声を押し殺して政宗は涙を零し続けた。
恥ずかしがる政宗を抱き上げたまま、小十郎は彼の部屋へと向かった。そこにはすでに女官たちの姿はなく、ただ、床が述べられているだけだった。枕元には飲み水まで用意されている。毒気を抜かれる程の静けさ。小十郎はその床の上に、政宗を横たえた。着物を剥いで内着だけの姿にした時、政宗が喉の渇きを訴えてきた。用意された器に水を注いで手渡そうとするが、政宗は頭を持ち上げただけでそのまま突っ伏してしまった。

「如何なされた、政宗様」
「…駄目。目が回る…」
その言葉に、小十郎は笑いを堪え切れずに吹き出した。が、次の瞬間には水を含むと政宗の唇の上の重ねたのだった。途端に肌の色が朱に染まる。絡み合う舌先。幼き政宗は潤いを求めて舌先を差し出してくる。何度かの口合わせで、しっかりと潤んでしまったその瞳を覗き込む小十郎。
「…どうやら、悪乗りしているのは、義姉上だけではなさそうだな…」
そう小さな呟きを洩らす、小十郎であった。

宴のあと

喉の渇きを訴える政宗に、水の入った器を手渡した小十郎。だが、それを受け取るべき相手は布団に突っ伏したまま。初めて酒精の洗礼を受けた幼き主は、手痛いしっぺ返しを食らっている最中であった。

酔いの為に、その体を起こす事も出来ない主に笑いを誘われたのだった。

己の過去が蘇る、目の前の姿。小十郎自身も経験のあるゆらゆらとしたあの感覚。身体を起こそうとしても力も入らないという有様。その時の感覚を思い出しながら、注いだ水を己の口に含んだ。僅かばかり、政宗の体を抱き起こすとそっと唇を重ねた。

注ぎ込まれる潤いに誘われるように、小さな舌先が彷徨い出てきた。絡み合わされるその感触に、相手の肌色が徐々に染まっていく。何度かの口合わせを重ねれば、しっとりと潤んだその瞳で見つめ返してきた程。

「…どうやら、悪乗りしているのは、義姉上だけではなさそうだ」

思わず、小十郎は相手の顔を見つめ返しながら呟いていた。

言葉の意味を知ってか、知らずか…。幼き主は小十郎の首に両腕を廻してきた。

「何の事だよ…、それは…」

「いや…、なんでもございませぬ。それよりも、今少し水を…」

そう小十郎が声をかけると、腕の中の政宗は眼を瞑って口先を差し出してきたのだった。

「…政宗様」

その様子に呆れ顔の、小十郎。

「…水。飲ませてくれるんだろう…」

目を瞑ったままでの催促。

溜息を付きながら小十郎は再び口移しに潤いを与えた。が、内心

満更でもなかったのだが…。これ以上は――、と政宗の体を横たえてやった。
「ゆっくりとお休みください、政宗様」
そう云って体を起こそうとした小十郎を、引き寄せたのは絡み付いたままの腕。
「…行くのか、小十郎。…俺を置いて、親父の所に…」
「何…を、言われます…」
「…親父の方が良いのかよ、…俺よりも…さ」
「政宗様…」
「行くな、小十…。ここに居て…」
小十郎の胸に頭を摺り寄せる様にしてくる、幼い存在。
「…なれば、眠られるまでこの小十郎が御傍に…」
優しく声をかけるが、胸の中の者は頭を振るだけ。
「…どうされました、政宗様」
その様子に、小十郎は再び言葉をかけた。
「……眠ったら、小十郎は…」
行ってしまう――。そう続けられた言葉は、啜り泣きを伴っているかの様に掠れていた。酒精を帯びた、温かな吐息が小十郎の胸元を擽った。
「…どうしたと云うのですか、政宗様。…いつもの、政宗様らしくありませぬな」
懐いてくる幼い主の頭を優しく撫でつける小十郎。
「…ここに居て。このまま…」
ついと上げられた幼い顔。涙に潤むその瞳に、小十郎の我慢も切れた。
「…このまま、と云われましても」
「駄目なの…か…」
対峙する相手の左目に映り込む己の顔。小十郎はふっ、と吐息を漏らした。
「駄目ではありませんが…、困ります」

「…何故」
真っ直ぐに見つめ返してくるその瞳に、小十郎は覚悟を決めた。
「己の立場を忘れてしまいそうになりますので…」
その意味を理解できない様子の政宗に小十郎は態度で示して見せた。
幼い顎先を指先で抑え込むと、ゆっくりとした動作で相手の唇に己の物を重ねてみせたのだった。潜り込ませた舌先で、相手のそれを絡め取る。首に巻きついたままの両の腕が小刻みに震えていた。ギュッと閉じられた瞼も小刻みな揺れを見せる。徐々に上気していく頬の色合い。拙いながらも小十郎の動きに反応を見せる小さな舌先。鼻から抜けてくる吐息の甘さに、小十郎は満足げにそれを離した。
馬乗りに近い体勢のままで、小十郎は己の顔を僅かにあげた。
「…小十郎。俺…、変だ…」
困惑げな表情を浮かべる政宗の吐息はいまだ乱れたまま。
「…いかがなされた、政宗様」
わずかに笑みを浮かべた小十郎の方は、確信の問いかけ。幼い政宗の体の変化など、とうに知っての事。
「…なんか、熱い…」
どこが――、と聞き返せば政宗は頬を益々染め上げただけ。それでも、小十郎から腕を離そうとしないのは…。
「……小十郎、…どうっ」
政宗の言葉が途切れたのは小十郎の舌先が耳元に触れたから。びくりと反応を見せる初の肌に、小十郎の笑みが零れた。
「…宜しいのですか、政宗様。このまま…」
「…そうすれば、お前はここに一緒にいてくれるか…。朝まで…」
気恥かしげな表情を浮かべる政宗の耳元に諾の返事を返した。
知識としては知らされている事とはいえ、未だに経験のない政宗。
「…どうすれば、良い。…小十」
不安の入り混じったような表を浮かべる、幼い主の体にその指先

を走らせた。
「そのままで…。政宗様…」
小さな頷きをみて、小十郎の指先が胸元の合わせの中に潜り込む。幼い突起は既に反応を示して立ち上がっていた。
「なっ…、ふっ…ん。…だめ、だ…、小十…」
触れられた刺激にか、途端に息の乱れる政宗の姿。
「…何が、駄目なのです」
「…嫌…だ。…俺だけ、こんな…ん…」
摘みあげてやると、途端に腰先が揺れだした。
「何が、嫌なのです…。政宗様」
乱れた吐息のまま、言葉を返す余裕もないのか、今度は政宗が行動で示して見せた。首に回った片方の腕を小十郎の襟元に掛けて来たのだ。
その間も、小十郎は政宗への刺激を止めようとはしない。
それに対して苛立ちを見せたのは政宗の方。
「…だから、嫌だって云ってるっ」
乱れを見せた体で、政宗は小十郎を押し返したのだった。
「…どうしたと云うのですか、さっきは…」
途端に豹変した、政宗の態度に今度は小十郎が困惑の表情を浮かべたのだった。
「…そうじゃないっ。…俺が、嫌なのは…」
云うが早いか、政宗の手が小十郎の襟元を肌蹴させたのだった。
「…なんで、俺だけがこんな恰好に…。おめえだけ、着崩しもしねえなんて…」
ふっ、と零れたのは小十郎の吐息。
「…脱げと」
「当り前だろうっ…」
怒りの為なのか、そうでないのか。ぷいっと横を向いて不貞腐れた政宗の頬は、紅く染まっていた。
「脱いでしまっては…、歯止めが効きませんよ」

「……構わねえよ、おめえなら…」
しばしの沈黙の後、小十郎は纏わりついたままの政宗の手を放させたのだった。無言のまま、床の傍に立ちあがると己の袴へと手を伸ばした。
静まり返った閨の中に響く僅かな衣摺れの音。政宗は、その音の方をじっと見つめていた。音が止むと内着姿の小十郎が己の傍に近づいてきたのだった。跳ね上がる心臓の音に、政宗は己の頬が熱くなっていくのを感じていた。
「…これで、宜しいのですか」
小十郎の問いかけに政宗は返事の代わりと両腕を伸ばした。
覆いかぶさる小十郎を、素直に受け止める政宗。繰り返される口合わせにも、舌先が反応を返して見せる。簡単に乱れていく政宗の吐息。
「…本当に、宜しいんですね。…加減が効かぬかもしれませんよ」
「…良い…って云ってる。…手抜きなんか、…承知…しね…え…」
政宗の初肌は、小十郎の刺激に染まっていく。
獣のような息使いの合間――。時々混じる悲鳴にも似た喘ぎ声。湿った音と肌のぶつかりあう音。こうして宴の狂気に塗れた夜は更けていった。

「…痛ってえぇ」
半ば、うつ伏せの状態で政宗は眼を覚ました。頭を持ち上げようとした途端に襲って来たのは割れ鐘を叩くような衝撃。――ガンガンと耳の奥で鳴り響くような頭痛。頭を抱える様に蹲ろうとした途端に襲って来たのは、別の場所の痛み。
「…って、な…ん」
蘇って来たのは昨夜の快楽の余韻。ところどころ…、断片的にしか思い出せない記憶。

「…って、親父のとこから戻って。――みんなで、酒盛りして…、その後だよな」
酔って気分が良かった所まではっきりと記憶が残っていたのだが…。
必死に思い出そうとするが、早朝飛びまわる雀の泣き声にも、頭痛が反応してきた程。
「…駄目だ。…思い出せねえ」
云いながら、政宗は痛む体を持ち上げた。床の上に起き上がって外を眺める。ずりっ、と落ちた肌を滑る感触に初めて己が何も身につけていない事に気がついた。後ろの痛みが、何が起こったのかを伝えてきた。が、誰と――、と云うと記憶が曖昧のままなのである。
「…ううん」
と、うなり声をあげていると、ついっと開いた部屋の引き戸。その方に顔を向ければ、苦笑を浮かべた小十郎が立っていた。
「やっと、お目覚めになられましたか」
近づく小十郎には、ああ、と短い言葉を返しただけ。
小十郎は手持ちの盆を傍に置くと、そっと政宗の体に寝間着を纏わせてきた。それに手を通そうと思った途端に、ぐいっと身体ごと引き寄せられたのだ。抱き留められた大人の男の胸元。微かに鼻先をくすぐる相手の体臭が、夕べの事を思い出させてきた。
「…お体の方は」
優しく問いかけてくる相手に、顔も向けずに答えた。
「辛え…。頭も痛いし…、それに…」
云い淀んだ政宗の体を抱き締める男の笑いが伝わって来た。
「二日酔い…、と云う事にして今日は休んでいてください」
「…動けねえ、しな…」
「何か、必要な事があれば、お申し付け下さい。政宗様」
「…責任、取れよな…」
「…何の事です」
「…、もう良いっ」

笑う男は、政宗を力強く抱いたまま。
「…小十郎」
「なんでしょう」
「…ずっと、仕えてくれるか…」
「そんな事で、宜しいのですか。…今までと変わりありませんが」
「…親父以上にだっ」
「…」
男から、笑いが消えた。
顔をあげてみれば、優しい眼差しが見下ろしていた。ゆっくりと近づいてくる顔に、政宗は思わず目を閉じた。唇に触れる寸前、相手の囁く声が聞こえた。
「小十郎は、生涯政宗様と共に…」
十分すぎる答。政宗は、抱き崩されていく感覚の中、目の前の男に縋りついた。

月影　～散華　1～

勢いよく駆け込んでくる誰かの足音。城守りを命じられている基信はその足音に顔を歪めた。

「何事かっ、騒々しい」

珍しく控えの間から飛び出し、その足音の主に向かって罵声を浴びせた。滅多な事では声を荒げることの無い彼の罵声に、他の部屋に詰めていた武将たちも顔を出した。先程まで客人を迎えていた城内には、古参の武将たちが集まっていたのだ。客に相対していたのは輝宗。家督を政宗に譲った後とはいえ、未だ伊達家にとってはその力を示す事の出来る存在。先日の政宗の戦に対する取り成しを求めての客人。

肝心の政宗はと云うと、早朝から城を開けていた。どうやら、輝宗に泣きついてきた相手方が気に入らないらしく早々に供を数人引き連れて出かけてしまったらしい。若様の気紛れにも困ったものだと、古参の武将たちは口に出していた。

気性の荒い政宗は、先日敵方に寝返った配下家臣の城攻めから帰った来たばかり。城内の女子供に至るまでの皆殺しをやってのける程の気性の荒さ。逆に、近隣の敵対武将からはその獰猛さで一目置かれることになったのだが…。

辛くもその戦で落ち延びた一派が、輝宗に対して政宗との取り成しを求めて来たのであった。その使者がつい先程城を出たばかり。隠居輝宗はそれを見送りに立っていた。そんな矢先でのこの足音。流石の基信も、声を荒げたのであった。

が、駆け込んできたのは徒小姓の一人。しかも、顔色も青ざめていた。

「いったい、何事だというのだ。客人が帰ったばかりぞ」

その基信の言葉に、徒小姓はその場に膝まづいた。

「遠藤様、その客が――」
「客が何だというっ」
「御館様を攫って…」
息も切れ切れのその言葉に、他の顔を出した武将たちの表情が曇った。
「何を馬鹿な…。あれは、若との取り成しを求めてきた者だぞ。そんな事をすれば…」
と、鬼庭が言葉を途切れさせた。
伊達家子飼いの「鼠」と呼ばれる男の姿をその視界に捉えたからである。
「鬼庭様、遠藤様。敵は御館様を拉致後そのまま南へ下りました。…すでに若様の方には伝令を走らせておりますが…」
その言葉に、基信は眉根を寄せながら指令を飛ばした。
「鼠、監視怠るな。逐一足取り報告せよ」
指令を受けた男は物音もさせずにその場から立ち去った。
「左月…。此度は我も出る。綱元を呼んでくれぬか…」
「なに、我が愚息をか…。御主が呼べというのであれば声かけるが…、どうするつもりだ」
「なに、いつもの我の代わりを頼もうと思ってな…」
「若様がそれを承知するか？」
「させてみせるさ。今回ばかりはな…」
云い切った基信は自室へと下がった。去り際、戦支度を命じたのは云うまでもない事だが…。

知らせを受けた政宗が狩り場から城に戻った時にはほぼ戦支度が完了していた。狩り場に動向していた者のうち、政宗の早掛けについて来れたのは三名のみ。小十郎、宗実、成美以外は早いうちに脱落していた。上がり敲きにはなぜか三名分の鎧櫃だけが用意されていた。その場所に鎮座していたのは戦装束を身につけた遠藤基信の姿。

「なんで、おめえがそんな格好してんだよ。…基信」
「此度は、我も出ます故に…」
静かなる基信の手招きに小姓たちが三人の戦支度をしていく。
「城守りは誰がするってんだよ」
「すでに、それも手配済み。此度の事、貴方様の指図は受けませぬ」

云い切る基信に、政宗の顔色が変わった。
「てめえ、何をっ」
「我は輝宗様の家臣。主救出の為の戦です。出て当然でしょう…」
その言葉に、周りの武将たちも顔色を変えた。
「輝宗様あっての我。それ以外は考えも付きませぬのでな。城守りは綱元に任せてあります。如何か…、和子」
「…所詮は親父の子ってか。上等じゃあねえかっ。貴様の腕が鈍って居ねえ事を祈ってるさっ」
「貴方様の足手まといにはなりませんよ。ご心配なく…」
戦装束に身を包んだ集団が騎乗の勢いで城の外へと飛び出した。
さしものこの行軍には左月の姿は無かった。が、伊達の精鋭部隊の早掛けに基信は遅れる事もなく付いて行った。
先陣を切るのは当然政宗。その後ろに小十郎と成美が付いている。三番手に付けているのは宗実。ほぼそれに並ぶように基信が居るのであった。ちらりと背後を振り返る政宗の視線。にやりと笑い返すと、基信は己の愛馬に鞭を入れた。途端に速度を上げる基信の愛馬。腰巾着二人を軽く抜くと、若き当主政宗へと並ぶ。
「出来れば、阿武隈河畔あたりで追い付いていただきたいのだが…、和子よ」
愛馬を駆る政宗に基信はそう告げた。
「なに…」
「先発部隊は差し向けてある。砲隊をなっ」
「な…」
「今少し速度を…。こちらが足が速いとはいえ大分時が過ぎている

…」
息を乱すこともなく政宗に告げる基信。
「基信、おめえ…」
「急がれよ、和子。こちらが多少脱落者を出しても構わぬ故…」
ちらりと視線を流す政宗に基信は頬笑みを返した。
「流石は輝宗自慢の和子よ…」
そう、政宗に告げると基信の愛馬はさらに速度を上げた。
「って、てめえ…。家臣の分際で親父呼び捨てにしやがってっ…」
「悔しければ、遅れるなよ。若造分際に未だ負けはせぬゆえ…」
背後から聞こえる怒涛の騎馬集団。それも、輝宗の代からの家臣たちの姿。あっと云う間に若手の四騎は最後尾集団へと送り出された。
「若、我らとて負けはせぬ。御館様がかかえし軍神の姿、とくと御覧あれっ」
すり抜けていく古参配下が政宗に向かってそう声をかけた。
かつては遠藤が召抱えていた配下の騎馬軍団。まさに水を得た魚の様な活きの良さ。さしもの政宗もその行軍に唖然とした程。が、政宗も気性の荒さではひけを取らない。負けず嫌いの性格も相まって、愛馬に鞭入れると次々に先行する騎馬軍団を抜いて行った。政宗の速度に追いついて行く若手三騎。いつの間にか、他の若手の姿は遠く遅れていった。が、政宗も構わず愛馬に鞭を入れる。やっとの態で基信に追いつき並んだ時には前方に味方の鉄砲隊の騎馬集団の姿をとらえた。
その集団を吸収した伊達騎馬隊。そのはるか前方には輝宗を捉えた畠山の行軍の姿を捉えた。一段と速度をあげた伊達騎馬軍団。その蹄の音に敵の行軍の足並みが乱れた。
完全に鉄砲の射程距離に近づくと、一斉に伊達の砲隊は狙いを定めた。
これに対して、動きの落ちてしまった畠山軍は輝宗を盾に相対した。

「親父っ」
政宗の叫びに輝宗は笑顔を向けた。
「撃て、政宗。そのままっ」
「なっ…」
その言葉にさしもの政宗も動きを止めた。が、替わりに砲隊への指示を出したのは基信。
「…撃て」
静かなるその命に従った砲隊。その銃声の中に政宗の咆哮が混じった。
二十余りの砲撃の中、次々と畠山の武将達が倒れていく。砲撃の切れた瞬間、躍り出たのは基信。
「何を呆けておられるか、和子よ。輝宗の遺志を継ぐのであろうやっ」
怒鳴りに近いその言葉に、政宗も我にかえった。
逃げ惑う敵勢力を次々に切り裂いて行く。相手方が死に絶えるのにそう時間はかからなかった。

基信が横たわる輝宗を抱き上げた。完全なる虫の息。
「我も後で逝く。輝宗、彼の地でまた相見えようぞ…」
基信の言葉に輝宗はゆっくりとその瞼を持ち上げてみせた。
「まだ、来ずとも良い…」
「また、そんな心にもない事を…」
政宗の傍まで運ばれている間の短い会話。輝宗は、嬉しそうに微笑んで見せた。
「…親父」
駆け寄る政宗の傍に輝宗を横たえる基信。身体に受けた銃弾の後からは血潮がゆっくりと流れ出していた。
「政宗、これが戦ぞ。たとえ身内を犠牲にしても勝たねばならん。それが上に立つ者の役目ぞ…」
涙ぐむ政宗。その眼尻に輝宗の指先が伸びた。

それを取り囲む伊達家臣団。政宗の傍に寄り添う小十郎に輝宗が声をかけた。
「景綱、政宗を頼むぞ…。これを支えてやってくれ…」
「御館様…」
徐々に失われていく光…。
「皆、また相見えようぞ…。彼の地で…」
政宗は輝宗の体に取りすがった。
すでに、その体は鼓動を止めていた。徐々に冷たくなっていく輝宗の体に取りすがる政宗。家臣団はその姿をただ、じっと見つめていた。

まるで負け戦の様なその集団。覇気のない騎馬隊は、そのまま城へと戻った。茶毘にふされた輝宗の遺骨を抱えたままで…。

迎えに出た義姫と左月。

輝宗の遺髪を渡された義姫は、やみくもに政宗を責め立てた。

「政宗っ。お前は親をすら見捨てるのかっ。勝利の為には、実の親すらもその手でしに追いやるかっ…」

くってかかる義姫に、政宗はただの一言も返そうとはしない。ただ、唇を強く噛みしめてその責めを一身に受けているだけであった。

「御止しなさい、御東様。我が、御館様の意思に沿うただけの事。政宗様に咎はありませんよ」

その、親子の間に身を挟んだのは基信。取り乱した義姫を傍女官に部屋に連れていくように命じた後、政宗に向き合った。

「なぜ、言い返さぬのですか。和子よ…」

殊のほか優しい口調の基信に、政宗はきつい視線を投げつけた。

「本当の事だろうがっ。…親父諸共の一方的な虐殺に何の意味があるって云うんだ。こんなの勝ち戦でもなんでもねえ…。何一つ言い返せねえ…」

「和子よ…。輝宗の最後の言葉忘れるつもりか…。輝宗の遺志、無駄にするつもりか…。」

そう云いながら、基信は若き当主の体を抱き締めた。

「本来ならば、この様な役目我がすべきことでは無いというに…。小十郎もまだまだだな…」

項垂れたまま自室へと下がっていく小十郎の後ろ姿を見つめながら基信は政宗を抱き留め続けた。

「戦いの意味ならば、輝宗が作って差し上げたでしょう。…二本松城には畠山の嫡子が残っておりましょう。それに、貴方に反旗を翻

した輩もね…」
「基信、おめえ…」
「今だけはお付き合いしますよ、和子。…御泣きなさい。輝宗の為に流す涙ならば受け止めて差し上げますから…」
基信の優しい口調にほだされたか。政宗は声を押し殺してむせび泣いた。その体をすくい上げるとゆっくりとした歩調で、政宗の寝所へと向かった。

深夜遅く、輝宗の部屋へと集った数名の武将たち。先代から仕えている云わば古参武将。誰が声をかけたわけでもなく、いつものようにそれぞれが車座に座っていた。輝宗のいつもの席には陶製の蓋付きの器が鎮座していた。輝宗の遺骨が納められた質素な陶器。そこに集った武将たちはただ、それを見つめていた。
「先の話…。真なのか…、御主が命じたというのは…」
静かな座敷に左月の問いかけが響いた。
「そうですよ。…我が命じました」
淡々とした口調で答えるのは基信。
「何故っ。他に方法は…」
「あったのかも知れませんね…。が、あの輝宗の表情を見たら、多分貴方でも同じ事をしたでしょうよ…」
うっすらと微笑みを浮かべた様な表情を見せる基信の顔を、左月はまじまじと見入っていた。
「あれは、案外と情が強い。あの様な状況下では、あれの取る道は一つですから…」
そういう基信が視線を走らせる先には、輝宗の変わり果てた姿。
「輝宗の望み…。我が聞かぬとでも御思いか」
飄々としたその基信の言い方に、左月は眉根を寄せた。
「御主は…。否、そうであったな。で、これからどうするつもりだ…」

左月の言葉に、他の武将連中も身を乗り出して聞きいった。
が、肝心の基信は微笑みを浮かべただけ。
「我は何も…。もう、輝宗もいないここには要は無い…。貴方こそどうするつもりなのですか…」
「って、輝宗殿の弔い合戦はどうするつもりなんだよ」
左月の言葉に頷いた者、ただ基信の方を見つめた者――。集った武将の反応は様々であった。
「我は何もしませんよ…。我の中では輝宗の弔い合戦は済みましたから…。まあ、あの場にいた敵将すべて追従させましたので…。それでも、輝宗は寂しがっていましょうから…」
「基信、まさかお前…」
左月の言葉に、基信はただ無言で頷いて見せただけだった。
しんと静まり返った輝宗の部屋。
そこに集った者達はそれ以降誰も口を開こうとはしなかった。ただ、変わり果てた元主君の姿をじっと見つめ続けているだけだった。

夜が明けても、伊達の城内にいつもの活気は戻らなかった。が、いつもと同じ様に声を荒げて激を飛ばす若者。伊達成実だけは、いつもと変わらぬ姿勢を貫いていた。
「ったく、おめえだけはいつもと同じだな…」
成実にそう声をかけたのは、小十郎の部屋から出てきたばかりの宗実。さしもの小十郎も輝宗の死は相当堪えたらしく、宗実が強制的に眠りに付けさせなければならぬ程であった。
「なんだよ、宗実かよ…」
「なんだとは失礼な奴だな…」
「はんっ。小十郎の部屋の方から出てきて何言ってやがる…。この状況下でよくもまあ…」
「この状況下だからだろう。一人でも多くの手だれは欲しいからなあ。で、そっちの方はどうなんで…」
「何の事でえ…」

「おめえの梵はどうかって、聞いてんだよ」
「…ああ、分かんねえや…」
急に大人しくなった成美。
「なんでえ、時宗丸は…。折角梵と二人っきりになれる好機だったろうに」
「なっ…、何バカ言ってんだよ。こんな時にっ」
「こんな時こそって云うんだよ。で、梵の様子は見て来たのかよ」
宗実の言葉に、成実は頭を振った。
それを見て、宗実はただ溜め息を零しただけ。
「何を言っていいもんか、分かんねえから…」
「餓鬼だねえ…。そんな時は言葉なんかいるもんかよ。ただ抱き締めて泣かせてやればいいだけだろうが、胸の中でさ」
云いながら、宗実は成実の胸元をつついた。
「餓鬼で悪かったなっ」
膨れっ面を見せる成実を、笑い飛ばしながら宗実は自分の部屋へと向かった。
残された成実は、貰った助言もどこかに吹き飛ばす勢いで、配下の者を呼びつけた。
「俺が梵にしてやれる事って云ったらこれしかねえもんな…」
独り言をつぶやきながら、それでも配下への指示は容赦なく飛ぶ。水面下での戦支度を整えるために。
「梵。俺は基信のようにはならねえ。…おめえの為ならこの命捨ててやるから」
政宗の部屋の方に向かって、成実はそう呟いた。

翌日の午後。やっと政宗は公の場に顔を見せた。面やつれたその姿は、家臣たちの同情を買うに十分すぎた。言い下された指令を、その場にいた全員が嬉々として応じて見せた程。輝宗の弔い合戦が下知されたのだった。その場にいなかった者は、小十郎と、基信配下の数名の武将のみ。が、それに気がついたのはほんの僅かの者達

だけだった。
　戦支度の大半は成実が手配済みであった。それを知った政宗は、引き続き成実にそれを任せた。後は出立の日取りを決めるのみ。ただ、その場ではその事は決定されなかった。
「いつでも出れるようにしてくれ、成実」
　政宗のその言葉に、成実は胸を叩いて応じた。
　が、ここで左月が口を挟んだ。老将である彼はいつも通り城詰め担当になるはずだったからである。
「若…。此度の戦、この老人もお連れ下さい」
「って、左月。何言ってやがる。おめえは城詰めに決まってんだろうが」
　そう返した政宗に尚も左月は食い下がった。
「御館様の弔い合戦とあらば、この左月。老体に鞭打ってでも参戦仕る」
「でも、おめえ鎧付けれんのか…」
　口を挟んだのは成実。
「鎧など無用の長物。そのような物、腕に自信がない者が使えば宜しい。若、何卒この老い先短い老人の願い聞き入れてはくれまいか…」
「駄目だ…って云ったらどうする」
　意地の悪い問いかけを投げる政宗に、左月は笑顔で答えた。
「なれば、この地で御館様の後を追いかけるだけ…。若が老人を蔑ろにしたとお伝え申す」
　正面からの左月の言葉に、さしもの政宗も頭を抱えた。
「じゃあ、誰が変わりに城詰めするんだ。ここを空にしちまったら意味がねえ…」
「それなれば、私目が…」
　そう、口を挟んだのは息子の綱元であった。
「先日同様、私目がその役果たさせて頂きたく…」
　まるで示し合わせたようなこの親子に、政宗はただ頭を掻いた。

「解った…。なら、左月は俺の傍詰めなっ。成実、そう手配してくれ」
云われた成実は諾の返事を返した。
「いや、出来れば先陣を…」
云う左月を政宗は苦笑を浮かべて見つめ返した。
「従えなければ、城に置いて行くが…」
「いやいや…、解り申した」
政宗の言葉に左月は一応の従いを見せた。
「ならば、何時でも動けるように各自準備を整えてくれ」
その政宗の言葉に一同は解散となった。

月影　～散華　3～

広間を後にした政宗が向かった場所は小十郎の部屋。予め人払いを申しつけてあったその場所からは誰の気配も感じられなかった。そっと戸を開けて中を伺い見れば布団の上に膝を抱えて座っている小十郎の姿。その膝に顔を埋めた体勢で微動だにしていなかった。

政宗は後ろ手で戸を閉めると、ゆっくりと小十郎の傍へと近づいた。

その肩に触れても小十郎は一向に反応を返さなかった。政宗はその傍に膝を付くと、両手で小十郎の顔を上げさせた。

泣き腫らし紅く染まった小十郎の瞳は焦点を結んでいなかった。その顔に、政宗の顔がゆっくりと近付けられていった。丹念にしつこいほど繰り返される政宗の口合わせに徐々に小十郎の瞳に光が宿って来た。

「政宗…さ…ま…」

その問いかけに政宗は小十郎の体を抱き崩した。

言葉を返すことなく、小十郎の肌に舌先を走らせる政宗。徐々に小十郎の吐き出す吐息も乱れ始めた。

「政宗様…、なにを…、ふっ」

「この状況で何無粋な事いってんだ、小十郎」

「ですが…、ふあっ…、んんんん」

小十郎の下半身を捉えた政宗の指先が容赦なく責め立てる。

「忘れてんじゃあねえか、小十郎。おめえは誰の家臣だよ。…それとも、おめえまで親父に引き摺られるっていうのかっ」

「っつう…、なん…の事…を…」

「親父の事、忘れろっては云わねえ…。が、おめえは俺を見ろよ。これからは俺だけを…、小十郎…」

乱暴に潜り込んでくる政宗の指根。輝宗の愛撫に慣らされた体も、

その性急さには付いて行けずに悲鳴をあげた。それでも、政宗の指根は容赦なく責め立てる。
「痛っ…、政…宗…様…」
小十郎の訴えに耳もかさず、ただ政宗はその狭道を無理やり広げていく。
その性急過ぎる政宗に何かを感じた小十郎。苦痛を堪えながらも、己の両手で圧し掛かる男の背を抱き締めた。
「政宗様…。今しばし…、くううっ…」
初めて受ける政宗の手管に、小十郎は苦痛の表情を浮かべただけ。先の愛撫で緩く立ち上がりかけたそれすらもうなだれる程に。
「今少し…、加減を…」
切れ切れの小十郎の言葉に、政宗はやっと組み敷く男の顔を見た。苦痛の脂汗を流すその姿に愛撫の手が止まった。
「…小十郎」
「構いませぬ…。ただ、少しばかり…」
視線を合わせた政宗に対して小十郎は微笑んで見せた。再び合わせられる唇。小十郎は政宗の全てを受け止めた。
乱れる吐息を隠そうともせず、政宗の手管に身を任せる小十郎。先の行為に痛む部分で、若き当主を迎え入れた。
「…忘れさせてくれるのでしょう、政宗様が…」
折り込まれる様な窮屈な姿勢にも関わらず、小十郎は政宗に抱きついて見せた。
「俺の事だけしか見えねえようにしてやるよ、小十郎…」
「これ以上…、貴方の事だけを考える事などできませんでしょうに…」
「ああ、…そうだよな」
「それに、御館様の遺言に逆らう程、小十郎は忘恩の徒ではありませぬ故…」
「小十…」
その後の若さに任せた政宗の行為に、さしもの小十郎も泣きを見

る羽目になった。流石に二夜連続ときては、体力的にも限界を迎えるのが早かった。その行為の激しさに、小十郎は政宗を銜えたまま意識を飛ばしてしまったのだった。

小鳥の鳴く声に小十郎はゆっくりと目を開けた。人肌の感触にその方を見れば、未だ少年らしさを残した政宗の顔が見て取れた。

じんじんと疼く体を気にしながらも、小十郎は寝返りをうとうとしたがそれも叶わなかった。背後から抱きつくような姿勢で寝息を立てる政宗の物が、未だ小十郎の中に納められたままだったのである。

小十郎の身じろぎに、政宗がゆっくりと瞼を開けた。

「…っ、政宗様…」

目覚めた途端に政宗は突き上げを始めた。

刺激に徐々に大きくなっていく小十郎の中の物。

「小十郎、ゆんべはとっとと落ちちまいやがって…。覚悟しろよ…」

「…まっ、うっ…。くっ」

若さに任せた突き上げはあっという間に小十郎を高みへと押し上げていく。

人の動きだす気配を感じながらも、小十郎は声を押し殺した。それでも、尚漏れ出す嬌声。それに気を良くしたか、若い主君の動きは激しさを増すばかり。

「…もっ、これ以上は…」

「これ以上…、なんだって…」

背後に伸し掛かる政宗は、それでも動きを止めようとはしない。

「…こ、声が…。くふうっ…、うううっ…」

「……仕方ねえなあ」

政宗は、小十郎の中から己の物を引き出すと組み敷いていたその体を返した。小十郎の足を高々と抱えあげると、再びの突き入れ。

「…これなら、文句あるめえ…」

云いながら小十郎の体の上へと覆いかぶさって来た。

仰け反ってその衝撃から逃れようとする小十郎の頭をとらえると、そのまま口を合わせにかかった。
息苦しさにもがく小十郎の舌先を、政宗のそれが絡め取る。小十郎の吐き出す嬌声と共に。湿った音と皮膚のぶつかり合う音の中に、獣のような息使いだけが混じっていた。

再びの大広間――――。
集まった家臣たちを前に、政宗は輝宗の埋葬の手配と今後の対応を指示した。初七日を過ぎたのち、直ちに進軍を開始すると――――。
事実上の輝宗の弔い合戦。下準備を早くから始めていた成実が政宗の左に座していた。その、反対側には未だ顔色の優れぬ小十郎の姿。車座になって勧められる軍議。政宗の正面には鬼庭親子を始めとした一族の武将達。いつもならばその中心に座する基信一派の姿が見当たらなかった。
一同には、基信の輝宗贔屓は周知の事。しかも、この度の顛末を聞いては流石の基信自身未だ立ち直れずと踏んでいたのであった。当の、政宗にしても軍議に欠席の報告は受けてはいなかったのだが敢えてそれを問いただそうとはしなかった。
「で、今居ねえ奴は、どう使う気なんで」
そう政宗に聞いてきたのは成実。
その問いに一同の顔に緊張が走った。
「別に…。好きにさせておくさ。動く気があれば、俺の指図なんかは受けねえだろうしな…」
「…例えば。趣旨替えして奴が相手方についたらどうする」
成実のその言葉に、激しく反応を返したのは左月であった。
「成実殿。いくらそなたの立場であっても、言っていい事と悪い事があろうっ。基信を愚弄する気かっ」
「基信に限った話じゃあねえだろう。俺の政宗贔屓と同様、いやそれ以上に御館様に傾倒している輩は多いんだぜ。その急先鋒ともい

うべき男がここに居ねえってのがなぁ。しかも何の沙汰も無くってなあ…」
成実の、暗に匂わせた反政宗勢力に対する牽制の言葉。さしもの左月もそれ以上の食い下がりを見せることなくただ若き主君の顔を見つめただけだった。
「…成実。基信に関して言えば、有りえねえ話だ。…まあ、他の奴らがどうかは解らねえがな。…兎に角、今回の戦に関しちゃあ、基信はあてにしてねえ…」
その、吐き出すように言う政宗の言葉をただ黙って左月は飲み込んだ。
「…が、兵力が少ねえってのも事実。成実、なるべくかき集めろ。その上で布陣を敷くしかねえからな…」
苦笑いを浮かべながらの政宗の言葉に一同はただ頭を垂れて見せた。急な戦支度の上、相手方の大将は間違いなく籠城戦を決めてくるはず。それ以外の周囲の敵勢力の動向も気になる。
「周りが、変な動きし出したら下手すりゃこっちが返り討ちに会う。…取り敢えず、情報収集もだな…。ある意味無謀な時期の戦さ。天候にだって左右され兼ねないしな…。それを承知でついて来れる者だけで良い、今のところはな…」
「私は意地でも参戦させていただきますよっ」
云い切ったのは最年長の左月。
「親父殿が老体で参戦するのに、我々が黙っていられようか…」
左月に続くのは他の一族武将達。左月の息子は、その親父の意気込みに頭を抱えつつ溜息をついた。
「私は残りましょう。皆様の帰る場所を守る者も必要でしょうから…」
溜息と共に綱元の口から出た言葉。大まかな布陣の確約を取り付けて、此度の軍備はお開きとなった。
広間を出ようとする政宗を、左月が呼び止めた。
「若っ。若も、基信が裏切ると…」

「…否。思わねえよ…。ただ、この戦に参戦するとも思えねえってのは事実だけどな…」
左月の言葉に返事を返した政宗は、相手を見る事もなくその部屋を後にした。

やはり案の定、基信ら一派は出立の日になってもその姿を見せる事は無かった。それぞれが、複雑な思いを胸に抱きながら敵の城を目指しての行軍が始まった。
流石に敵も政宗の行動を読んでいたらしく、想定通りの籠城戦へと戦は進んで行った。冬の厳しさも敵に回り、思うような戦火を揚げられずにいた時、その知らせは政宗の元へと届けられた。
基信以下数名の武将達が出奔したというのである。
その知らせに浮足立った古参武将達を怒鳴りつけたのは成美の存在。小十郎はただ、政宗の傍らでその知らせを聞き大きな溜め息をついて見せた。
「あのお方は…」
その、小十郎の呟きを政宗は聞き逃さなかった。
「小十郎…、なんか知ってんのか」
「知っているのは左月殿の方でしょう…。私はただ、予感がしていただけですから…」
政宗の幕陣の中に重い空気が流れた。
名前を出された左月は、小十郎同様にこれまた大きな溜め息を付いた。
「私とて、知りませんよ。ただ、奴ならば…」
それ以上二人は口をつぐんだままだった。
政宗のどんな問いかけにも、重く閉ざされた二人の口は開く事は無かった。ただ、二人が言った事は、「基信探索に人を割りさく必要は無い」と、言う事だけ。
政宗は、二人の奇妙な合致を不思議な面持ちで見つめたいただけだった。

その数日後――――。
基信発見の知らせが政宗の元に届けられた。
出奔した基信他の武将達も同時に発見されたと…。
その知らせを政宗の幕陣の中で聞いたあの二人は、それ以後の報告を聞く事もなくその場所を静かに退席したのだった。
残された政宗以下の他の武将達が耳にした報告内容に、一同は二人の行動の意味を知った。
基信らが発見されたのは、輝宗の墓前であった。「鼠」らの探索にもかかわらず、彼らの行動はそれ以上に早かったのだろう。
大きな血溜まりの中、彼等は横たわっていたのだった。
特に基信は最も輝宗に近い位置で発見された。満足げな、笑みを浮かべたような表情で冷たくなっている姿をである。ちょうど輝宗の死後十四日目の事であった。

戦華

夜も更け、不寝番の見回りも既に終わった刻限。シンと静まり返った城内。未だ朝晩の冷え込みも強いこの時期。その深夜の回廊を足早に歩む男の姿があった。目指す場所はすでに馴染みと化してる一室。灯りの落とされた廊下を気にも留めずに進んで行くのだった。

その男は、その一室の前に立ち止まると、周りを伺う事もなくその部屋の中に身を滑り込ませた。

その部屋の中央には寝具が一つ敷かれているはずだった。

男は足先で探るように、暗闇の中を足音を忍ばせて進んで行った。ふと、触れた柔らかい感触。男はその場で足を止めた。

闇の中、微かに衣擦れの音が聞こえたかと思うと、男は手慣れた仕草でその寝具の中に身を差し入れたのだった。

故・輝宗の弔い合戦は壮絶を極めるものだった。

輝宗の死の原因を作った敵対勢力に加担する豪族たちが多すぎた。いかに精鋭ぞろいの伊達軍勢とはいえ、正面の的に対するだけでなく側面をついて来る他の軍勢とも闘うと言う事になれば、明らかにその武力に大差が出てしまったのであった。周囲はほぼ敵ばかり。肝心の宿敵は狙い通り、篭城戦を展開していると言うのにその城にすら近づけない有様。それどころか、後退する事もままならぬ程の敵勢に囲まれていたのだった。その戦いが、あと僅かでも長引いていたら――。そう考えると、流石の小十郎景綱も生きた心地はしなかった。

手筈通りに別けられた部隊。それも当初の相手だけなら互角、否、有利に事を運べていたはずだった。だが、戦火が切り落とされてみ

れば、敵勢は数倍以上に膨れ上がっていたのだった。
精鋭武闘集団とはいえ、その数倍以上もいる敵に囲まれてしまっては、防戦すらままならない。それぞれが各個撃破の憂き目にあうどころか、当主政宗ですら父親の後を追う形になりかねなかったのだった。最も得意とする連携作戦も取れず、主の身を守る者達も限りなく少なくなっていく。
小十郎をはじめとする家臣の一部は、自らを『政宗』と偽り、囮となってその戦火を混乱していくしか方法は無かったのだ。迫る薄闇。激しい戦いの中では相手の顔をじっくりと確かめる余裕などない。
その中で、馬上にきらめく三日月前立てを見つけた小十郎は、自分に迫りくる敵にも構わず、主の傍へと愛馬ごと突っ込んだのだった。ちょうどその時、政宗自身は目の前の敵に相対する事で精一杯だったらしく、己の背後に忍び寄った敵の存在には全く気が付いていない様子だった。すでに、政宗付きの武将の大半は骸に変わっていた。残るのは数名の年若い者達だけ。
小十郎自身も似たような状況だった。政宗の背後の敵を薙ぎ倒した後、小十郎は徐に政宗の前立てに手をかけた。
驚いて振り返ったのは、疲労の色濃い若き当主の顔。その場に三日月前立てを叩き落とすと、次の瞬間には政宗の愛馬に鞭を一つくれてやったものだ。突然狂ったように走りだす馬に、しがみ付くしかない若き当主を笑顔で見送ると、声高らかに名乗りを上げた。
「伊達藤次郎政宗、推参っ！」
その張りのある声に、暴走馬に向かおうとした敵も全てが小十郎の方を向いた。
我先にと、功績を競って六日月前立てを持つ男に向かって殺到する敵武将たち。
その、目と鼻の先の一本橋の上では、手負いの左月が声を張り上げたものだ。
「何のっ。若造如きの出る幕ではないっ！鬼の左月に此処は任せ、

即刻御引きなされいっ！」
　囲まれる手勢を前に、白頭巾には黒いしみが幾つも付いていった。
　それでも、小十郎の方を見つめる瞳はまるで微笑んでいるかの様にも感じた。
「若造を道連れにしたとあっては、大殿に顔向けできんっ」
　そう言いながら、左月はまた一つ、目の前の武士の首を刎ね飛ばした。
　僅かばかり遅れて飛び込んできたもう一騎。
「伊達が頭領、政宗見参っ！」
　小十郎と同じ、六日月前立て姿の籐五郎成実の姿。
　この登場に混乱したのは敵の武士。同じ前立てを付けた、二人の『政宗』。
「若が二人となってまで、この老人の願いを阻むつもりかっ！」
　怒鳴りつける勢いの左月の言葉。鬼気迫る勢いに、何かを悟った二人の『政宗』。敵の数人を馬脚で蹴散らすと、
「親父殿に宜しく伝えてくれっ！」
　そう叫んだのは、どちらであったか――。
　小十郎の目配せを受けた成実も、政宗の愛馬の駆け抜けた方角へと馬を走らせたのだった。ちらりと、背後を振り向いた小十郎の瞳に映ったモノ……。数本の槍に貫かれながらも、満足げな笑みを湛えた鬼庭左月の最後の姿であった。
　はっきりと前方も確認できない程の闇が迫る中。二人は本陣手前のみすぼらしい小屋も前で政宗の愛馬を見つけたのだった。
　声もなく、示し合わせたようにその小屋の前で馬を下りた二人。
　警戒したまま、太刀をいつでも抜ける体勢で、その小屋の戸を慎重に開けた。
「虚け二人が、来やがったのかっ！」
　口の悪いしゃがれ声は、二人とも何度も耳にした事のある師とも呼ぶべき和尚の声。囲炉裏端で、戸口に背を向けて座るハゲ頭。振り向きもせずにこう言い放ったものだ。

「貴様らのような不肖の弟子どもには、呆れ果ててモノも言えんっ。ワシはお前らの顔など見たくもないっ。あばら家一つ、勝手に使うが良かろうっ！」
怒っているとも取れる声音はいつもの事。
後から入って来た二人に見向きもしないまま、和尚は小屋を出て行ってしまった。呆気に取られた二人の前に残されたモノ――。手当を施された政宗の姿だった。粗末な筵掛けの状態で、ただ板の間に横たわるその姿。疲労が強いのか、閉じられたままの瞼はピクリともしなかった。その横に置かれた政宗の黒胴鎧には生々しくも、数個の矢じりがめり込んでいるのであった。
その傍らに駆け寄る二人。その規則的に動いている胸元を見てか、揃って安堵の溜め息を吐いていた。
どちらからともなく、若い主を左右からはさむように座った二人。
暫くの間、二人は声もなく主の寝顔を見つめ続けていた。
パチパチと爆ぜる火の粉。
暫くすると、ゆっくりとその主の瞼が開けられていった。
「此処は……」
本陣手前の小屋だ――。と、答えたのは成実。
「夢なのか、これは……」
虚ろな一つ目が聞いていた。
「今暫く休まれよ、政宗様」
一瞬だけ、一つ目が見開かれた後、またゆっくりと瞼は閉じていった。
その姿を確認してか、小十郎が立ち上がりかけた。
「どこへ行く気だ？」
「取り敢えず本陣まで――。御大将の無事だけでも知らせないとな……」
「ならば、俺が行く。年寄りは休んで居やがれっ」
すくっと、立ち上がった成実。
「成実、俺の馬を使え……。伝達を頼む。夜明けと共に陣を例の山

へ移せと……。仕切り直しだ……」
目を開けぬままの政宗の言葉。
「梵、おめえ……」
「もう少しだけ休んだら俺も行く――。それまでは、おめえが総代だ……」
ちらりと政宗の方に視線を向けた成実。傍らに置かれた政宗の鎧具足に視線が止まる。
「おめえにしか頼めねえし、勤まらねえ話だが……」
「……分かった。但しっ、俺がやるのは総代までだ。梵、ちゃんとっ」
「ああ……。遅くとも夜明けまでには合流する――。ただ、今だけはこのまま……」
分かった……、と言うと成実は急ぎ足で小屋を後にしたのだった。
残された二人。
馬の蹄の音が遠ざかって行った途端に、政宗の嗚咽が聞こえたものだ。
「どこか痛むのですか、政宗様」
ついと、覗き込むように体を寄せた小十郎に、政宗の両腕が伸びた。
しがみ付くように、独眼からはとめどなく涙が零れ落ちていた。
「俺が……、俺が、激情に任せて突っ走ってしまった為に……」
震えながら呟く政宗。
「親父だけでなく……、左月も……、そして……他の……」
啜りあげる政宗。
その体を、小十郎は無言のままで抱き寄せていた。
「……おめえまで失う寸前だったんだ」
言いながら政宗は、濡れた顔を小十郎に向けていた。
小十郎の胸元に縋りつく政宗の指先は震えていた。
戦の高揚感がそうさせたのか。それとも、涙に濡れた主の顔が憐憫を誘ったのか――。

それすらも分からないまま、小十郎はゆっくりと顔を近づけていた。
ゆっくりと閉ざされる独眼。その顎先を捉えて、主の吐息を己の唇で塞いでいった。震える政宗の両腕が小十郎の首に巻き付いてきたのを合図に、ゆっくりとその若い身体を抱き崩していったのだった。
口先を合わせたまま、政宗の手が小十郎の鎧紐に伸びた。器用に紐解く主の指先。外れる胴鎧。
小十郎が僅かばかり体を離すと、寂しげな目つきで政宗が見つめ返して来た。
「今だけ……。何もかも、忘れたい……んだ、小十郎……」
甘えるように差し出されたその指先に、小十郎は口付けた。
「今、この一時だけでも……」
と、目元を染めて言ってくる政宗を、小十郎は微笑みながら見降ろした。
「今少しの間……。この鎧を解く時間を待っては頂けませぬか……」
その言葉で益々政宗は頬を赤らめた。
小十郎は立ち上がると、手早く結び紐を解き始めた。
待ち切れないのか、時間を惜しむように政宗の手も小十郎の具足を留めている紐へと伸びてくるのだ。
主の前で鎧下着姿となった小十郎。そのまま主の上へと圧し掛かっていった。
「手加減が効かぬかも知れませんよ……」
耳元でそう囁くと、政宗は「構わねえ……」と、小さく返してきたものだ。
そのまま首筋に顔を埋めれば政宗の体臭が強く感じた。埃と汗の匂いに混じった政宗の体臭。汗ばんだ肌は、強い塩味を感じるほど。不思議と小十郎は嫌悪を感じなかった。むしろ、その匂いに己の雄蕊が反応してくる程だったのだ。
小十郎が政宗と身体を繋いだのは過去に二度だけ――。

一度目は酒に酔った幼い政宗に請われるまま、己自身を納めさせた。
二度目はつい最近の事。それも、政宗自身を己が受け入れる羽目になったのだった。何にせよ、最初の時以来の関係。しかも、あの時は小十郎自身も酒に酔っていたのだった。小十郎自身、後にも先にも『男』を抱いたのは先の一度きり。
主の要請とは言え、はたして致す事が可能かどうか――。
一瞬だけ、小十郎の頭をよぎった不安は。立ちどころに消え去った。
鎧下着の中に手を忍ばせれば、明らかに女の肌とは違う、みっしりとした肉の触感。それでも一向に己の物は萎える事無く反応したまま。胸元に立ちあがった小粒を摘まむと、若い肌はそれだけで汗ばんでくる程。
揺れ出す若い主の腰先。すでに、その吐息も熱く乱れていくのだった。
切なそうに寄せらせる眉根が、幼き頃の面影を纏う。
苦笑に似た小十郎の吐息。その音に、潤んだ瞳が見つめ返していた。
「ここには濡らすモノがありませんので……」
差し出した小十郎の指先を、政宗は無言のままにしゃぶり出した。まるで男のモノを愛撫するかの様に……。
「あうっ……、もうぉ……、小十……郎」
ゆっくりと指根を納めてやると、政宗の両脚はさらに奥へ誘うように広げられていくのだった。
苦痛に歪むその顔。だが、若い主はそれ以上の激しさを求めて来た。
「もっと……、何も……分からなくなるほど……」
途切れがちな政宗の言葉。若い主の手は小十郎のモノを扱き出すのだった。
「早く……」

まだ十分とは言えぬ状態にも関わらず、政宗は小十郎自身をねだるのだった。
小十郎は、主の求めのままに自身を突き立てた。
声もなく仰け反る政宗の体。きつ過ぎる締め付けに、小十郎の方も我慢の限界を超えた。己の快楽を求めて、激しく突き動かす。政宗も快楽を求めて腰をくねらせた。激しくぶつかり合う湿った音。喜悦の涙を浮かべながら、喘ぐ政宗。その表象を視界に捕え、小十郎は容赦のない抜き差しを繰り返す。
いくら若いとはいえ、戦闘後の疲労を色濃く残していた政宗である。急に全身を震わせて、小十郎をきつく絞りあげたかと思うと、間もなく白濁を吹き上げた。小十郎もそれに合わせるかの様に中に吐き出した。
若い当主は、満足げな緩い吐息を吐きだした直後、深い眠りの中へと落ちていった。

夜明けと共に行動を開始した二人。幾分やつれた様な面立ちだったが、顔色だけは以前を取り戻した政宗。彼は成実の愛馬に跨っていた。政宗の愛馬は昨夜のうちに成実が騎乗していったからだ。その後ろを影のように付き従う男。時折心配そうな視線を主に向けていた。
「そんな顔するんじゃねえ、小十郎。俺は大丈夫だから……。手前の仕出かした事の後始末ぐらいはきちんとつけねえとな……」
張りの出た若い主の声に、小十郎も安心したらしく一息をついた。
新たに設置された本陣。たどり着くとすぐに成実が走り寄って来た。
「大丈夫か、梵……」
「ああ、心配かけて済まねえ……」
「取り敢えず、割り振りだけはしてあるぜ。後は梵次第だが……」
と、心配気に覗き込む幼馴染に、政宗は笑顔で答えていた。そこへ走り込んで来たのは密偵の一人。持ち帰って来たその情報に、独

眼の瞼が、きっと持ち上げられた。
「出るぞっ、成実。小十郎っ！これで終いにするっ。合図をっ！」
政宗の兜には予備の三日月前立てが輝いていた。
開戦してみれば、昨日の苦戦がまるで嘘のよう――。
それもそのはず。敵方に付いていた他の豪族たちの姿が忽然と消えていたのだった。当初の予定数を大幅に下回った伊達軍とは言え、独眼竜の前立てが光り輝く今、彼らの闘志は最高潮にあった。両翼を担う若い竜の化身。成実と小十郎の率いる部隊が、当初の敵を虱潰しに踏みつぶしていくのだ。他にも血の気の多い連中。若造に負けじと、残った古参武将達の勢いも止まらない。勢いのついた竜の軍団は、簡単に勝利をもぎ取っていた。引き際も鮮やかに、住処へと戻る軍団。その隊列の中心部分には、戸板に乗せられた左月を含む力尽きた竜の化身達も混じっていたのだった。手にした勝利の割りには、あまりにも代償の過ぎた戦であった。

すでにその戦から数か月。
にもかかわらず、未だにその傷を引きずっていた政宗であった。
他の者達には決して見せない姿。
戦以来、政宗は伊達家の当主として、いつも凛とした姿を見せつけているのだった。そう己の本心は押し殺したままで……。それが、時々堰を切ったように溢れ出すのだった。それも唯一、小十郎の前でだけ――。
深夜の行動はその現れ――。
抑えきれなくなった精神状態が、政宗を蝕む。不眠症へと追い込んでいくのだった。
寝具の中に潜り込んだ男が囁いた。
「助けて……、小十……」
先にその寝具に背を向けて横たわっている男に向けられた言葉で

あった。そっと、甘えるように、その大きな背中へと身を寄せる政宗。
男の方は、とうに目覚めていたのだろう。深い溜め息を漏らすと、その体の向きえ緒変えて甘えて来る体を抱き寄せていた。
「……眠れませんか、政宗様」
その声音は、政宗を優しく包み込むようであった。
「ああ……」
言いながら、政宗は男の胸元に甘えるように顔を埋めていた。
「いつまでたっても、子供のようですな……」
「嫌うか……、小十郎」
「いえ、構いませんが……」
言いながら、小十郎は政宗に口付けた。
まるで母親の乳でも探る子供のように、政宗の手が小十郎の肌を弄って来るのだった。
代わりとばかりに、小十郎の手は政宗自身を弄り出す。
揺れ始める腰先と、乱れる吐息。小十郎の手管に政宗は素直な反応を返すのだった。しかも、小十郎を誘うようにその両足すら開いて見せる。
「おめえとだけだ……、こんな事すんのは……。おめえの前でだけ……だから」
言いながら政宗が小十郎を受け入れるのだった。

夜も明けきらぬ早朝。どちらからともなく寝具から身を起こした二人。睦言もないまま交わす口付け。手慣れた仕草でき着ける政宗に、そっと介添えの手を差し伸べる小十郎の姿。
無言のままに小十郎の部屋を出た政宗は、何事もなかったかの様に政務室へと向かうのだった。
深夜の二人の密談――。その噂が立ったのは、もうしばらく後の事。それを耳にした綱元が、真意も分からずに二人にこう提案して

いた。
「こそこそとおやりにならなくとも……。いっその事、日を決めてやっては如何ですか？」
と――。
それを聞いた一人は完全な乗り気の表情。そしてもう一人は苦笑を浮かべていた。たまたま、その場に居合わせたもう一人。現在、当主代理を務められる男だけは、その柳眉を吊り上げて反対したと言う。

継承（前書き）

前作よりも、大分年代が開きまして、「大阪夏の陣」以後の話になっております。
その辺を考慮の上、御読みいただければ幸いです。

継承

その使者が政宗の元を訪れてからすでに半刻が過ぎていた。
受けた報告に返事を返す事もなく、政宗は無言のまま謁見の間を後にした。報告の内容に、同席の家臣たちは表情を亡くしたというのに、肝心の政宗自身はむしろ無表情のまま。
家臣たちは、それでも主のいなくなった上座を見据え続けた。ただひとり、伊達成実を除いては…。
厩へと続く回廊。ゆっくりとした重い足取りで進む政宗。肩を落とし、まるで敗残の将を思わせる様なその後ろ姿に、成実は深いため息をついた。わざとの足音でその姿を追い越しざま
「付き合うよ、梵。…行くんだろ」
幼馴染ゆえか、従兄弟ゆえか、他の武将のいない、二人きりの場では、いつもそう成実は呼びかける。今も昔も変わらない風習。
その言葉に、顔を向けた政宗からはいつもの覇気すら感じられない。残されている左目が、何かを探し求めるように中空を彷徨っていた。
「なに、うだうだ考えてんだよ。おめえの性分は、そんなもんじゃねえだろうが。」
煮え切らない様子の政宗の胸元を締め上げるかのように詰め寄る成実を、無言のまま見つめ返していた。
「…そうだよなあ、成。そんで、突っ走ってよく奴に小言くらってたんだよなあ…」
襟元を掴み上げる成実の手にそっと手を添えた。口元を僅かに歪ませただけの政宗の表情は、笑みとも泣き顔ともとれる。何か、懐かしい物でも見るかのように、左目がより一層細められる。
「俺だって…、相当、奴にはカリがあるからな。」

苦笑いを浮かべた成実。
政宗は、その相手に何かを感じ取ったのであろう。一度、溜息と共に目を伏せると。わかってる…、そう呟きを漏らした。
「成…、遠掛けすんぞ。付き合えや。」
目を開けて、成実を見据える姿は、いつもの覇竜。
「良い歳して、城抜け出して遠掛けか？…誰かの、小言が聞こえるようで、ありがてえなあ…」
昔を思い出すぜ、梵―――
馬番の制止もなんのその。悪餓鬼に戻ったかの様な二人は、黒毛と赤毛のそれぞれの騎馬に跨り、風のように駈け出して行った。

この数日、覚醒と混迷を繰り返していた小十郎であった。ただ、覚醒するといっても、目を開き夢現の様な表情のまま、周囲の声掛けにも僅かな声を発するのみであった。開けられたその瞳には何も映らないかの様に、愛し子や、孫達の声にもなかなか反応を示さなくなっていた。すでに、城内の者達にも、その命の灯が消えようとしているのは伝わっていた。
それが、どうであろうか。
重苦しい空気を蹴散らすかのような、荒々しい馬の嘶きと蹄の音。それが、城に近づくにつれ、徐々に見開かれた瞳には理性の色が浮かび上がってきた。
城内の者にも聞きなれた、荒々しい二人の声が、微かに部屋の中まで聞こえてくる。
「あのお方は…、全く使用の無い…」
力こそないが、はっきりしたその言葉に、傍詰めをしていたお梅と大八が振り返った。
「お梅、悪餓鬼二人、ここに連れて来い。…ついでに、左門もな…」
言われたお梅は、一瞬何のことか理解できないまま、この城の主

の姿を除きこんだ。
「今来た、あの馬鹿ども二人をだ…。」
何かを悟っているかの様な穏やかな表情とは裏腹の言葉。己の仕える主を「悪餓鬼」呼ばわりできる立場に、深い主従関係をみたような気がするお梅であった。
「今、お連れします…、殿さま」
静かに、小十郎の寝所を退いたあとで、いつものお梅とは思えぬほどに、小走りで来客の元へと向かった。

案内された三人は、それぞれの思いのまま、横たわる城の主をただ見つめた。安らかな表情のまま、目を閉じている小十郎にかける言葉が見つからなかったからである。老いと病に蝕まれたその姿は、嘗ての勇ましさを思わせる部分は見当たらなかったのだ。
「何を、そのような処で突っ立っておられる。」
目を開けぬままの、小十郎の言葉に、一同は固唾をのんだ。覇気こそないものの、依然と変わらぬその口調に、一番驚いたのは嫡子・左門。この数日の容態からは、到底想像出来ぬ程のはっきりとした意思表示。
(親父殿は…、このお二方の前では己を取り戻すのか…。それほどに…)
「おめえの今の面見たら、気ぃ抜けちまったさ。積もり積もった、小言の仕返し…って思ってたけどなあ。この借り、手前の息子に負わせちまっても良いよなあ…」
成実の言葉に、ゆっくりと小十郎の瞼が持ち上がった。
「好きにされるがよい、成実殿。…倅にそなたの相手務まるならば…、な」
「その言葉…、後で後悔するなよな」
左門の首根っこを捕まえて、引きずるように成実は小十郎の寝所

から出て行った。
その姿を見つめる小十郎の表情は、やけに穏やかだった。
お梅や大八の控える部屋に、無理やり引きずりこまれた左門は、成実に向かって不服を唱えた。
「何をされますか、成実殿。親父殿の呼びつけに応じる事なく、すぐに退室するとは…」
抗議の間に、成実は左門から手を放し、どっかと床の上に腰をおろした。
「…いくら、息子のおめえでも、邪魔する権利はねえ。…最後の逢瀬ぐらい、ゆっくりとさせたれや…」
成実の両膝の上で固く結ばれた拳が細かく震えていた。その上にポツリ、ポツリと雫が落ちる。
お梅は、その姿に自分の父親の最後の時を見た。父に殉じようとした家臣たち。それが叶った者と、そうでない者…。後者がいたからこそ、今のお梅や大八が存在する。そしてその残された者達が垣間見せた涙と、同じ様なものを目の前の武将から感じ取ったのだ。
「御義父様は、本当に果報者で御座いますね。この様に、皆様に…」
成実に向かって差し出された白湯の器に波紋が広がった。
「…済まぬ、お梅殿。…そなたの父上は」
「…いえ。…短くとも、御義父様が…」
声を詰まらせた、お梅を、そっと左門が抱きしめた。
「済まん、お梅。…だから、な…」
幼き大八は、おろおろしながらも、成実の元に歩み寄ってきた。
「成様…。成様が泣くと、大殿様が悲しむよ。…とう様も、悲しむから…、ね」
成実の膝の上にちょこんと乗り上げて、幼い両手で頬を挟んできた。
「だからね…、成のおじ様…」
成実の顔を覗き込む幼い子。そっと抱き締めた成実は、「そうだな…、そうだな…」と力なく繰り返し呟いた。

言葉もなく、政宗は枕元に腰をおろした。
「…夢を、…見ておりました、政宗様」
「…ああ」
「…御館様と、貴方様の事を…」
「…」
「あの時…、御館様に殉じる事を禁じられ、こうして今まで貴方様の影となって過ごしてきた事を…」
「小十郎…、おめえ…」
「後悔など…、ただ…、もう一度あの頃に戻れるものならば…」
深い呼吸で言葉を止めた小十郎の顔を、じっと政宗は見詰めた。その、何もかも悟りきった表情に、不覚にも涙をこぼしてしまったのである。細く、衰えた小十郎の指先がその雫をすくい上げるまで、其の事にすら気がついてはいなかった。
「政宗様、…景綱は、もう一度あの頃に帰りたい…。ただの守り役であった、あの頃に…。だから、せめて夢の中だけでも…」
その言葉を遮るかの様に、政宗は小十郎の体に覆いかぶさった。乾燥した小十郎の唇の上に己を重ねて、言葉を止めた。
「おめえは…、俺を置いて、一人で逝くっていうのかよ…。小十郎…、いつも一緒にいるっていった、あん時の言葉は嘘なのかよ…」
政宗も元服したての頃を思い起こしてか、子供さながらに小十郎に抱きついた。零れ落ちる涙で、小十郎の顔を濡らしてしまっても構わぬ程であった。
「ご無理を申されるな…、政宗様。何時か人は逝く場所でございましょう。…約束違えは致しませんよ。この景綱には、もはや出来ぬ事でも、貴方の御傍には…。…『小十郎』が付き従いましょうや。」
小十郎の促すかの様な視線に、政宗はその示す先を振り返った。
「…倅がおりまする、政宗様。これよりは、貴方様がアヤツをお導き下さい。…藩主として、あれが主として…。…それと、あと…」
徐々に小さく、聞き取りにくくなる小十郎の言葉を、必死の思い

で政宗は受け止めた。自分の吐息すら詰めるように、一字一句聞き逃すことのないように…。
「…御館様のもとで、…この景綱、いつまでも…、貴方様を見守り申しあげまする…」
その言葉を最後に、二度と小十郎の瞳は開かれることはなかった。弱々しい吐息しか吐き出さなくなったその体を、愛おしく横たえてやる政宗。しばらくの間、押し殺した政宗の咽び泣きだけが小さく聞こえていた。

数日後、本城の自室の中で、政宗はその知らせを受けた。
――――白石城主・片倉小十郎景綱の訃報。そして、その死に殉じた六名の武将の名を…。
使者を、無言のまま退室させると、政宗は文箱の中に残っていた書き存じの通達書に目を走らせた。手にした書簡が小刻みに震えた。
「小十郎…、また、いつの日か…」
小さな、その呟きを聞いた者はいなかった。
『小十郎景綱の死後、嫡子・小十郎重綱を白石城主に任命する』
墨書きの所々が滲んでしまっているそれを、胸に抱きかかえたまま、政宗は部屋の中央から動く事はなかった。

継承（後書き）

ドラゴンファミリーの主人公はあくまでも【片倉小十郎景綱】となります。従いまして、この作品で、この御話は終了いたします。
ここまで御付き合いくださいました読者の方に深く感謝申し上げます。

＜補足＞
最終話の登場人物のなかで【お梅】と【大八】という二人が登場いたしますが、この二人は、『真田幸村』（たぶんこの名前の方が有名でしょうから…）の子供達になります。大阪夏の陣の折、道明寺決戦に起きまして、真田側から重綱（左門）が、お梅を託され白石城に匿い、その後彼が後妻に迎えるというエピソードがございました。大八はお梅を頼って白石まで逃げ落ちてきまして、最終的には「仙台真田家」を起こす事までになりました。（一時期は、片倉性を名乗っておりましたが…）　この二人の話につきましては、機会がありましたら一つの作品に仕上げてみたいと思っております。

又何れ、伊達家カラミの作品を引っさげて参りますので、その時はよろしくお願い致します。

暗黒女帝・猫又垂氷　拝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3490i/

ドラゴンファミリー

2010年10月8日15時58分発行